

門真市

元町遺跡Ⅱ

(仮称)パナソニック株式会社西三荘駅前ビル計画に伴う発掘調査報告書

2022年12月

門真市

門真市

元町遺跡Ⅱ

(仮称)パナソニック株式会社西三荘駅前ビル計画に伴う発掘調査報告書

2022年12月

門真市



元町遺跡 II調査区全景 南より



写真1 井戸1 SE16 出土遺物



写真2 井戸2 SE26 出土遺物



写真3 土坑2 SK21出土遺物



写真4 剣形石製品

序 文

わたしたちの住む門真市域の大部分は、かつての河内潟の北岸に位置する低湿地で、蓮根やクワイが広く栽培されるなど、低地の環境を活かした豊かな水郷地帯でした。

こうした水郷農村の景観は、昭和8（1933）年に松下電器製作所が本社・工場を門真地区に移転したのをはじめ、戦後の高度経済成長期を経て、産業都市として大きく様変わりしました。この間、工場の進出や住宅開発などに伴う発掘調査が行われ、これまで判然としなかった古い時代の歴史についても、徐々に明らかになってきました。

このたび完成した本報告書は、令和3（2021）年8月に京阪電車西三荘駅前に所在するパナソニックホールディングス株式会社敷地内で実施した元町遺跡の発掘調査報告書です。

当該遺跡は平成14（2002）年に市内で初めて古墳時代の掘立柱建物跡が発見され、遙か昔から門真に人々が住み続けてきたことを明らかにした貴重な遺跡です。

今回の調査では、古墳時代と中世の2つの時期の井戸が見つかりました。他にも、土器や木製品など豊富な遺物が出土し、門真が古くから長い間、賑わってきた地域であることが改めてわかりました。

本書の刊行が発掘調査の報告というにとどまらず、郷土の歴史や文化をはじめ、広く文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、このたびの発掘調査に際し、深いご理解と多大なご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和4（2022）年12月

門真市長 宮本 一孝

例　言

- ・本書は、大阪府門真市元町 22 番 6 号で計画されたパナソニック株式会社（現パナソニックホールディングス株式会社）による西三莊駅前ビル計画に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である元町遺跡に含まれる。
- ・現地調査、整理作業及び報告書刊行に至るまで、事業者であるパナソニック株式会社と、工事主体者及び施工責任者である株式会社竹中工務店のご協力を得た。
- ・現地調査は、令和 3（2021）年 8 月 2 日から同年 9 月 10 日まで行った。整理作業及び報告書作成は、令和 4（2022）年 4 月 1 日に開始し、同年 12 月 26 日の報告書刊行をもって終了した。
- ・本調査は、門真市が主体となって実施し、事業主より委託を受けた株式会社島田組の協力を得た。また、整理作業から報告書刊行まで、重金 誠氏（株式会社島田組）に多大なるご協力を賜った。本発掘調査の調査体制は下記のとおりである。

門真市長	宮本 一孝
門真市市民文化部長	水野 知加子
門真市市民文化部次長	山 敬史
門真市市民文化部生涯学習課長	隈元 実（令和 3 年度）
同	清水 順子（令和 4 年度）
門真市市民文化部生涯学習課長補佐	森井 康喜
門真市市民文化部生涯学習課主任	常松 隆嗣
門真市市民文化部生涯学習課係員	淺井 達也（発掘調査担当）

- ・遺物の水洗・注記・接合・復元は株式会社島田組が実施した。
- ・遺物の実測・トレイス及び遺構図トレイスは、株式会社島田組が実施した。
- ・本書に掲載の遺構写真は浅井が撮影し、遺物写真は株式会社島田組が撮影した。
- ・本書の執筆は、第 3 章第 2 節 5 出土遺物は重金、その他の部分と編集は浅井が担当した。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、門真市が保管・管理している。
- ・現地調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申しあげます（順不同、敬称略）。
宇治原 靖泰（八幡市教育委員会）・趙 哲濟（一般財団法人大阪市文化財協会）・柳本 照男（元韓国東洋大学校教授（株）島田組調査指導員）・我妻 佑哉（大阪大学大学院人文学研究科）

凡 例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T. P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、平面直角座標系（第VI系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、遺構種別ごとに通し番号を付し、それ以外のものは調査時の略号を記している（例：井戸1、溝1など）。
- ・遺構図における線種・線号は以下の通りである。
調査区（実線・0.4mm）、遺構の上端（実線・0.3mm）、
遺構の中端（実線・0.2mm）、遺構の下端（実線・0.1mm）、
搅乱（実線・0.1mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線、ケズリによる稜線は実線で示した。また、須恵器の断面は黒塗りで表現している。
- ・本文中における遺物の器種名は、「壺」「甕」などの簡易な表現とし、「○○形土器」という表現は用いていない。
- ・土層の色調は、農林水産省農林技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（1989年版）に準じた。

目 次

卷頭図版

序文

例言・凡例

目次

第 1 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査地周辺の既往調査	1

第 2 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的環境	4
第 2 節 歴史的環境	5

第 3 章 調査成果

第 1 節 基本層序	9
第 2 節 遺構と遺物	9

第 4 章 まとめ

まとめ	53
-----	----

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 門真市位置図	2
第2図 事業範囲と調査区位置図	3
第3図 調査地周辺地形図	4
第4図 周辺の遺跡地図	7
第5図 調査区東壁土層断面図	10
第6図 調査区平面図	11・12
第7図 井戸1(SE16)	13
第8図 井戸2(SE26)	13
第9図 土坑1(SK20)	14
第10図 土坑2(SK21)	15
第11図 溝1・2・3(SD28・30・31)	17
第12図 井戸3(SE33)	18
第13図 溝4(SD13)	18
第14図 ピット1(SP7)・土坑3(SK14)	19
第15図 ピット群	20
第16図 ピット群と不明遺構	21
第17図 井戸1(SE16)出土遺物	22
第18図 井戸2(SE16)出土遺物	25
第19図 土坑2(SK21)出土遺物1	27
第20図 土坑2(SK21)出土遺物2	30
第21図 溝1・2・3(SD28・30・31)出土遺物	31
第22図 井戸3(SE33)出土遺物1	35
第23図 井戸3(SE33)出土遺物2	37
第24図 ピット1(SP7)・土坑3(SK14)出土遺物	39
第25図 その他の遺構出土遺物1	41
第26図 その他の遺構出土遺物2	43
第27図 包含層出土遺物	45

表目次

表1 周辺の遺跡一覧	8
表2 検出遺構一覧表	46
表3 遺物一覧表(1)	47
表3 遺物一覧表(2)	48
表3 遺物一覧表(3)	49
表3 遺物一覧表(4)	50
表3 遺物一覧表(5)	51
表3 遺物一覧表(6)	52

図版目次

- 卷頭図版 1
元町遺跡II調査区全景 南より
- 卷頭図版 2
写真1 井戸1 SE16 出土遺物
写真2 井戸2 SE26 出土遺物
- 卷頭図版 3
写真3 土坑2 SK21 出土遺物
写真4 剣形石製品
- 図版 1
写真1 調査区北側 真上より
写真2 調査区北側 真上より
- 図版 2
写真3 調査区中央 真上より
写真4 調査区南側 真上より
- 図版 3
写真5 井戸1 (SE16) 東から
写真6 井戸2 (SE26) 東から
写真7 土坑1 (SK20) 東から
写真8 土坑2 (SK21) 上層 東から
写真10 溝1 (SD28) 南から
写真9 土坑2 (SK21) 下層 東から
写真11 溝2・3 (SD30・31) 西から
- 図版 4
写真12 井戸3 (SE33) 西から
写真13 井戸3 (SE33) 南から
写真14 SP7 (ピット1) 遺物出土状況 上層
写真15 SP7 (ピット1) 遺物出土状況 下層
写真16 土坑3 (SK14) 南から
写真17 下層確認トレンチ
写真18 調査状況 1
写真19 調査状況 2
- 図版 5
出土遺物写真 1
- 図版 6
出土遺物写真 2
- 図版 7
出土遺物写真 3
- 図版 8
- 出土遺物写真 4
- 図版 9
出土遺物写真 5
- 図版 10
出土遺物写真 6
- 図版 11
出土遺物写真 7
- 図版 12
出土遺物写真 8
- 図版 13
出土遺物写真 9
- 図版 14
出土遺物写真 10
- 図版 15
出土遺物写真 11
- 図版 16
出土遺物写真 12
- 図版 17
出土遺物写真 13
- 図版 18
出土遺物写真 14

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

令和2（2020）年度に、門真市元町22番6号の京阪電車西三荘駅北側に近接するパナソニック株式会社の社屋建替工事が計画され、翌年度より旧建築物の解体撤去及び新築工事が開始されることになった。

この事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「元町遺跡」の範囲内に該当していたため、開発者と事前協議を行い、遺構・遺物の有無について確認調査が必要である旨を回答した。今回の調査は、開発区域の面積は7,830m²と広大なものである。しかし、旧建築物の基礎が大きく広がっていたことから、確認調査は極めて限定的な区域にならざるを得なかった。

令和3年3月、事業者より文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出され、門真市は要発掘調査の意見を添えて大阪府教育委員会（以下「府教委」）へ進達した（門市生第3452号）。これに対して府教委は門真市に発掘調査の実施を通知した（教文第1-92号）。門真市は府教委に確認調査について、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った（門市生第3124号）。

門真市は令和3（2021）年5月31日から6月2日まで、開発区域内の9ヶ所で確認調査を実施した。調査の結果、敷地内の大部分は旧建築物の基礎工事により搅乱をうけているが、調査地中央東よりの敷地内道路部分から土坑を検出、土師器、黒色土器などが出土することを確認した。このため、工事計画の見直しや工法の変更ができず遺跡の破壊を回避できない範囲に対して、本発掘調査を実施することになった。

以上を経て、改めて文化財保護法第99条に基づく本発掘調査が8月から開始され、門真市は直ちに埋蔵文化財発掘調査の報告を行った（門市生第3187号）。

調査期間は令和3年8月2日から開始し、9月10日に現地調査を終了した。調査面積は211m²である。

第2節 調査地周辺の既往調査

元町遺跡は、平成6（1994）年12月、門真市元町の共同住宅建設に伴い発見された。門真市域の西端、元町・小路町所在の微高地上にある古墳時代から中世の集落遺跡とされている。調査面積が少なく、遺跡の全体像は未だつかめていない。

調査地近辺では、これまで数回調査が行なわれ、遺構・遺物が確認されているが、報告書が刊行されている4回の調査について概要を述べたい。

昭和62（1987）年、今回調査地から京阪電車西三荘駅を越えて南150mの橋波口遺跡範囲内で共同住宅・店舗ビル建設に伴う発掘調査を実施した。この調査では、奈良時代の甕棺墓、平安時代初め頃の井戸、平安時代中期の祭祀遺構と考えられる灰の詰まった大きな穴のほか、中世の溝等が発掘され、土器のほか牛馬の骨等も出土した。

平成元（1989）年、今回調査地の北西350mに位置する松下電工株式会社（当時）敷地内において、第二別館建設に伴い発掘調査を実施した。この調査地は、門真市の西三荘遺跡に含まれるが、隣接する守口市の八雲東遺跡とまたがっているため、両市で合同調査を実施した。この調査では、門真

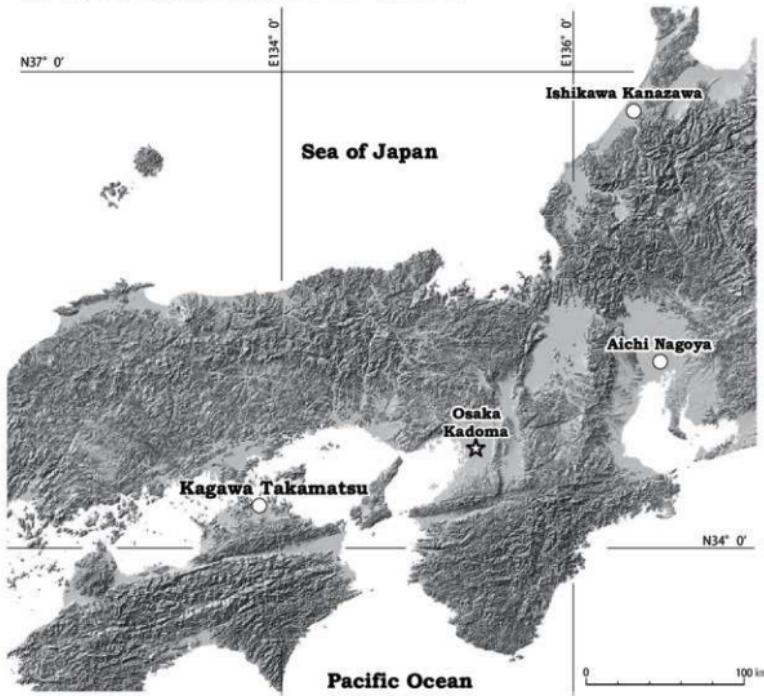
市最古の考古資料となっている縄文時代後期の土器のほか、弥生時代中期～中世の土器、石器、鉄製品、木製品、牛馬等の骨が出土した。さらに室町時代の墓地に関係するとみられる遺構が確認され、土師皿、応永17（1410）年銘等の墨書のある塔婆、柿経等が出土した。またこの時の調査で慶長元（1596）年の伏見地震による液状化跡が確認されている。

平成14（2002）年、今回調査地の東200mに位置する元町遺跡範囲内の元町中央公園において、整備事業に伴う発掘調査を実施した。この調査では、古墳時代中期の掘立柱建物跡の一部と建物跡に並行する長円形の土坑を検出した。これは市内で発掘調査により、中世以前の建物跡を検出した初めての例である。土坑からは、須恵器、土師器のほかに市内で初めて製塙土器が良好な保存状態で大量に出土した。

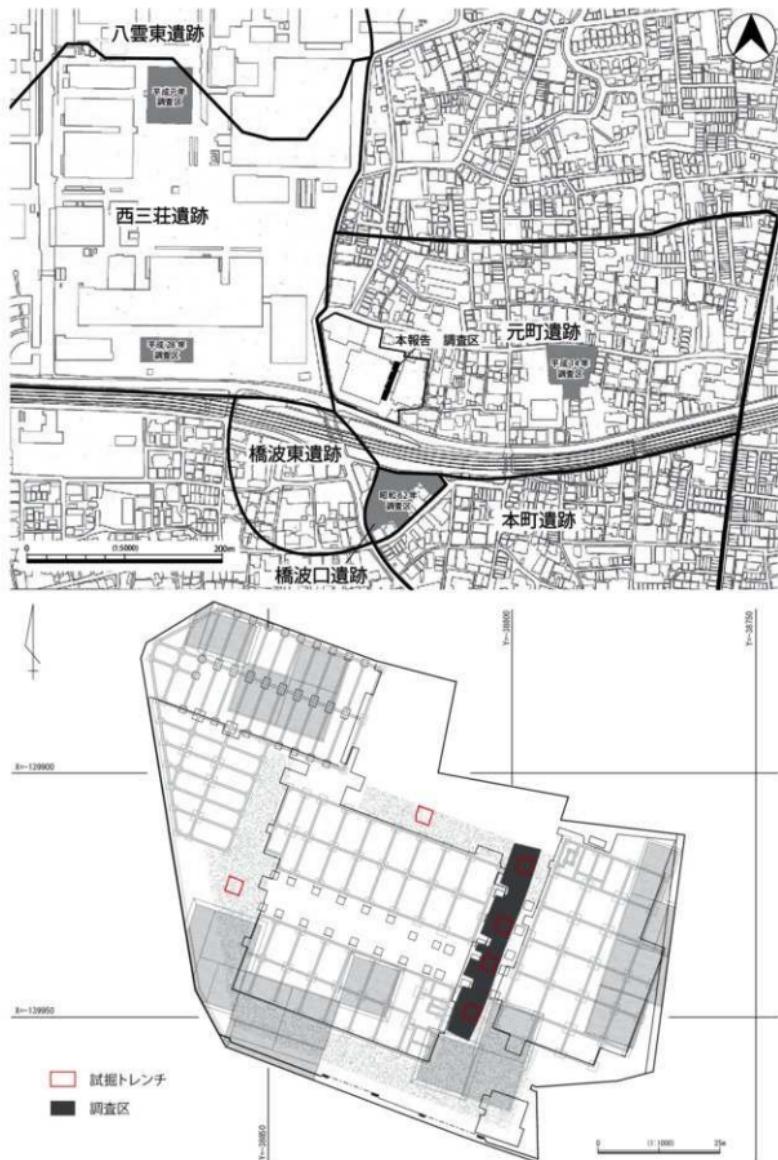
平成28（2016）年、今回調査地の西300mに位置する西三荘遺跡範囲内のパナソニック株式会社敷地内において、松下幸之助歴史館新築工事に伴う発掘調査を実施した。この調査では、近世の畠を検出し、陶磁器、瓦器、瓦質土器、土師器、須恵器、瓦、木製品が出土した。

以上、既刊の報告書の調査について記述したが、縄文時代から近世に至るまで、様々な遺構・遺物が検出されており、それ以外に今回調査地の近隣でおこなわれた確認調査でも埴輪片が出土しており、周辺に古墳が存在した可能性が指摘されている。

今回の調査は、元町遺跡の発掘調査としては2回目となる。



第1図 門真市位置図



第2図 事業範囲と調査区位置図

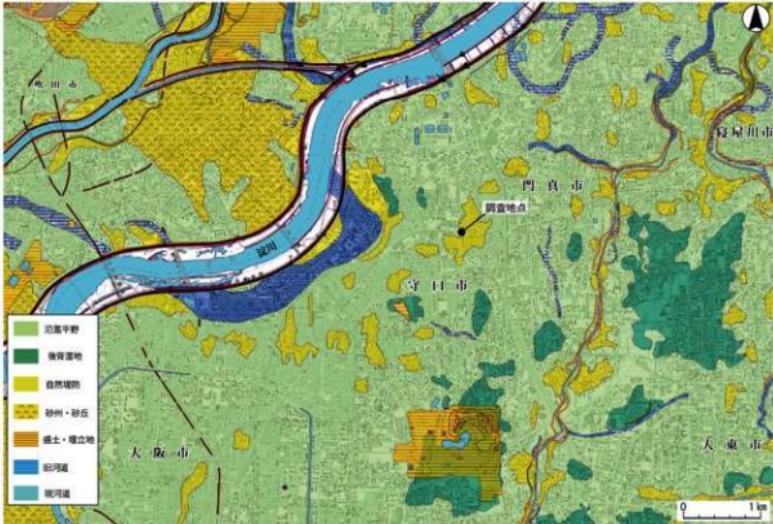
第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

門真市は大阪府の北東部の北河内と呼ばれる地域に位置する。市域の大部分は生駒山系を東に望む淀川左岸に広がる沖積地の「寝屋川低地」と呼ばれる低湿地であり、大阪平野で最も低い標高4m以下の低地である。北東には寝屋川が北西から南東方向に流れ、中央には古川が北西から南東方向に市域を縱断している。これらの河川に沿って自然堤防が形成されている。

元町遺跡は門真市の北西部の元町と小路町にまたがって所在する古墳時代から中世にかけての集落遺跡である。「河内潟」の北岸に位置し、その沿岸に形成された微高地に立地する。同遺跡は、京阪電車西三荘駅と門真市駅間の線路の北側の旧村落と商店街、新興のマンション等が混在する市街地に立地し、標高2m前後の平坦地となっているが、実際に現地を歩いてみると、遺跡の中央北側が高く、そこから南、東、西方向に下るごく緩やかな傾斜を感じ取ることができる。

元町遺跡の西側には西三荘遺跡、南側には橋口遺跡と本町遺跡が隣接する。平成14(2002)年の発掘調査では、古墳時代の掘立柱建物跡や土坑が検出され、これは門真市で初めて確認された古墳時代の集落遺構である。さらに土坑内からは5世紀後半の須恵器とともに、製塙土器が大量に出土しているため、元町遺跡は塩の生産や流通とも関連のある遺跡と考えられる。



第3図 調査地周辺地形図（国土地理院地図に加筆して作成）

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

門真市は全域が厚い沖積層に覆われているため、現在のところ旧石器時代のヒトの活動の痕跡は確認されていない。大東市深野南のボーリングデータによると、第4氷期（約7万年～1万年前）の河内平野深野地域は湿地が広がっており、現在より寒冷な気候であったことを示しているため、近接する門真市域もほぼ同様の環境であったと考えられている。

2 繩文時代

門真市域でヒトの活動の痕跡を確認できるのは、縄文時代後期からである。平成元（1989）年、西三荘遺跡（2）・八雲東遺跡（18）の発掘調査においてこの時期の土器片（北白川上層式Ⅲ期・約3500年前）が2点出土した。この土器の表面には摩滅が認められず、他から流入した土器と考えられないことから、周辺に陸地が存在し、漁撈などの活動を営んでいたことが伺える。さらに平成3（1991）年、三ツ島西遺跡（12）の発掘調査において晩期初頭（滋賀里Ⅰ又はⅡ式期・約3200年前）の土器片が約50点出土しているが、これらは表面の摩滅が著しく、他からの流入と考えられる。

3 弥生時代

弥生時代から門真市域の遺跡の範囲は広がってくる。前期頃の市域の状況は、河内湾の陸化がさらに進んで、汽水の「河内潟」となっていた。水走沿岸州は離水が進み、細長く伸びた砂州上に門真市域の集落が形成されたと考えられる。この時期の市域の集落遺跡は、大和田（9）・普賢寺（5）・西三荘（2）・古川遺跡（6）がある。

昭和38（1963）年、京阪電車大和田駅構内の工事中に、中期に鋳造された銅鐸3個が出土した。周辺は現在、大和田遺跡として包蔵地に指定され、銅鐸は国立歴史民俗博物館に保管されている。昭和60（1985）年と翌61（1986）年に実施した普賢寺遺跡の発掘調査では、前期から中期の土器や石包丁が出土しており、前期と推定される土坑も検出されている。平成元（1989）年、西三荘遺跡の発掘調査において、弥生時代の遺構は確認されなかったが、中期前半から後期の土器が多く出土した。平成10（1998）年、古川遺跡の発掘調査において前期から中期に築造された方形周溝墓が10基検出され、市域において前期から集落が存在したことがあらためて確認された。

これ以外に昭和37（1962）年に市南部の三ツ島遺跡（14）から弥生時代のものと考えられる刳船の未完成品が発見され、船体内部から後期の土器片が出土した。

4 古墳時代

古墳時代の門真は、仁徳天皇の時代（5世紀前半）に「茨田堤」が築かれ、「茨田屯倉」が置かれたことが記紀に記されている。残存している堤の一部は「伝茨田堤」として昭和49（1974）年に大阪府史跡に指定（昭和58（1983）年に追加指定）されている。昭和55（1980）年、「伝茨田堤」の隣接地の宮野遺跡（8）の発掘調査において、中期から後期の土器や滑石製の有孔円板などが出土している。しかし、堤防が築かれた時期を解明する発掘調査成果は未だ得られていない。

古墳時代の河内は、時代を象徴する巨大前方後円墳が多数築造されたが、門真市域において現在確認されている古墳は少ない。平成12（2000）年、普賢寺遺跡（5）の発掘調査において、市域で初めて古墳が確認され、「普賢寺古墳」（25）と命名された。普賢寺古墳は6世紀初頭に築造された直

径約 30 m の円墳と考えられ、周囲には幅約 4 m の周溝が巡り、周溝からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪のほかに盾人・蓋・鶏などの形象埴輪が出土した。令和 2 (2020) 年、普賢寺遺跡の発掘調査においても、普賢寺古墳の南約 120 m から古墳を新たに 1 基検出した。この古墳は 5 世紀後半に築造された直径約 20 m の南西部に造出部が付く円墳と推定され、古墳のくびれ部から須恵器や多くの埴輪がまとまって出土した。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪のほかに、蓋・家・盾・人物・鳥・馬などの普賢寺古墳を上回る豊富な種類の形象埴輪が含まれていた。現在、門真市域で確認されている古墳は普賢寺遺跡内の 2 基のみであるが、同遺跡の北約 1 km に所在する守口市梶遺跡 (17) からは 5 世紀末から 6 世紀前半にかけて築造された 3 基の古墳 (24) が検出され、豊富な種類の埴輪が出土しており、周辺に古墳群を形成していたと推定されている。同様に豊富な埴輪が出土した普賢寺遺跡周辺にも同時期に古墳群が形成されていた可能性は高いと考えられる。

前述したように平成 14 (2002) 年の元町遺跡 (1) の発掘調査において、中期から後期の集落遺構が確認されている。この集落は普賢寺遺跡内の古墳 2 基の築造時期とほぼ同時期に存在したと考えられ、古墳との関連も含めて重要な遺跡である。

5 古代

門真市域では古代の遺跡は少ない。昭和 62 (1987) 年、橋波口遺跡 (3) の発掘調査において奈良時代の須恵器の壺を使用した甕棺墓や、奈良時代末から平安時代初頭頃の曲物を転用した井戸、平安時代の祭祀遺構とみられる灰の詰まった土坑が検出された。

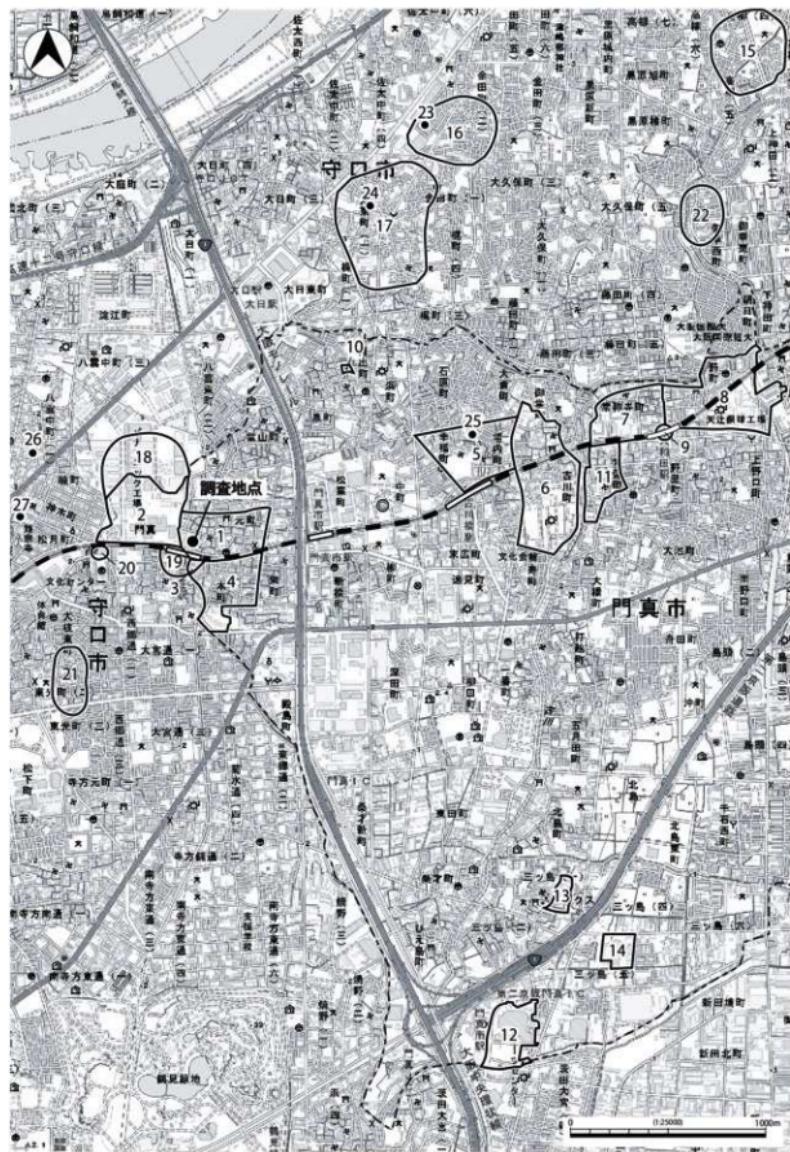
6 中世

中世に入ると門真市域では遺跡の数は増加していく。市の発掘調査においては、ほぼ中世土器の出土が見られ、中世には集落域が広がっていたことが確認できる。

西三莊遺跡 (2) の発掘調査では多くの瓦器碗・土師器皿とともに、鉄製の鎌・ヤス・小刀のほか、応永 17 (1410) 年銘の卒塔婆や柿経が出土しており、中世の洪水を受けているが、周辺に集落や墓地が存在したと考えられている。

普賢寺遺跡 (5) は中世に存在したと文献資料に記されている「普賢寺」に関する寺院跡であるが、これまでの発掘調査において、多くの土器や瓦のほか、柿経、絵馬など寺院の存在を想起させる資料が多くみつかっている。特に昭和 59 (1984) 年の調査において、鎌倉時代の金銅製密教法具及び金銅製僧形坐像が出土し、平成 17 (2005) 年に大阪府の指定文化財に登録された。令和 2 (2020) 年の調査においても同型の金銅製密教法具の蓋や平安時代末の大型掘立柱建物跡が検出されている。しかし、中世寺院跡を示す確たる遺構は未だみつかっておらず、今後の調査が期待される。

古代以前は市域の北西部の微高地上に遺跡が集中していたが、中世以降は市域北東部でも集落遺跡の存在が確認されるようになる。平成 16 (2004) 年から同 19 (2007) 年にかけて実施された糀本遺跡の発掘調査では掘立柱建物跡や井戸が検出され、さらに水害をふせぐための溝や堤防が築かれていたことも明らかになった。この遺跡からも輸入磁器や瓦、「僧」と墨書きされた土器など出土しており、周辺に寺院が存在したことを窺わせている。



第4図 周辺の遺跡地図

番号	遺跡名	時代	種別
1	元町遺跡	古墳～近世	集落跡
2	西三荘遺跡	縄文～近世	集落跡
3	橋波口遺跡	奈良～近世	集落跡
4	本町遺跡	奈良～中世	集落跡
5	普賢寺遺跡	弥生～近世	集落跡、社寺跡
6	古川遺跡	弥生～中世	集落跡
7	常称寺遺跡	古墳、中世	集落跡
8	宮野遺跡	古墳～中世	集落跡
9	大和田遺跡	弥生時代	集落跡
10	月出町遺跡	中世	散布地
11	横地遺跡	弥生時代、平安	散布地、その他
12	三ツ島西遺跡	縄文～古墳時代、中世～近世	集落跡
13	三ツ島北遺跡	中世	集落跡
14	三ツ島遺跡	その他（不明）	散布地
15	高柳遺跡	弥生～平安	集落跡
16	大庭北遺跡	古墳～中世	集落跡
17	梶遺跡	平安～近世	集落跡
18	八雲東遺跡	縄文～近世	集落跡
19	橋波東遺跡	弥生～古墳時代、平安～近世	集落跡
20	橋波西之町遺跡	弥生～古墳時代	集落跡
21	東光町2丁目遺跡	中世	集落跡
22	中神田遺跡	中世	集落跡
23	大庭北古墳	古墳時代	古墳
24	梶2号墳	古墳時代	古墳
25	普賢寺古墳	古墳時代	古墳
26	一里塚跡	近世	その他（一里塚）
27	守口宿本陣跡	近世	その他（本陣跡）

表1 周辺の遺跡一覧

第3章 調査成果

第1節 基本層序

今回の調査地は、パナソニック株式会社の敷地内の調査であるため、ほとんどが旧工場、社屋の建築の際に盛土が施されている。盛土を造成した際に旧耕作土層は全て削平されたと考えられ、盛土直下に、遺物包含層が堆積している。

今回の調査地の基本層序は、大別すると、大きく3段階の堆積により成り立っている。

第1段階は建物建築の際に盛られた盛土層である。現地表面の標高は約2m～2.3mで北側へ向かって下がっている。盛土は標高1.0m～1.2mまで堆積している。調査区東壁土層の第1層がこの段階である。

第2段階は古墳時代後期から中世の遺物を多く含む遺物包含層である。ごくわずかであるが、弥生土器も含まれていた。第2層～第5層がこの段階である。

第3段階は自然堆積層（いわゆる地山）である。本層上面が遺構検出面である。古墳時代後期と中世の遺構が混在している。第6層～第8層がこの段階である。本層上面の標高は0.5m～1.0mであり、調査区北側に向かって検出面の標高が低くなっている。このため、調査区南半では第6層が存在せず、下層の第7層が露出し、遺構検出面となっている。古墳時代と中世の遺構が混在しているのは、本来の古墳時代の遺構面が削平された後、中世の遺構面が構築されたと考えられる。そのため遺構の埋没時期は概ね出土遺物によって推定した。

第2節 遺構と遺物

1 概要

今回の調査の結果、古墳時代及び中世の遺構を33基検出した。内訳は、井戸3基、土坑3基、溝5条、ピット18基、性格不明遺構4基である。

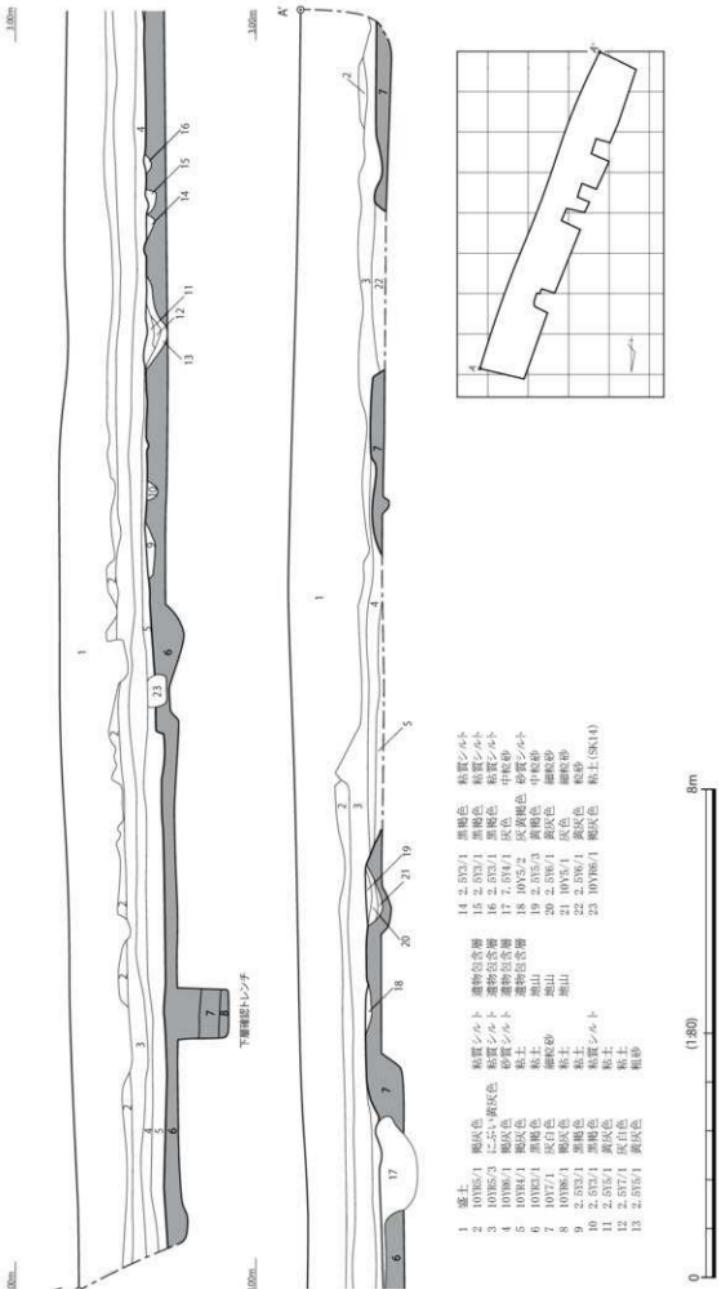
本報告書では、上記の遺構のうち、比較的遺存状態が良好で遺物が一定量出土している遺構を選定し、井戸3基、土坑3基、溝4条、ピット1基について、以下に詳細を述べる。その他の遺構については第15.16図と第2表に詳細を記した。

遺物については、遺物収納コンテナ20箱分の遺物が出土した。古墳時代の土師器、須恵器、中世の土師器、瓦器が多いが、大型の木製品や石器類も若干出土した。須恵器は古墳時代中期末（5世紀末から6世紀初頭）のものがほとんどで、大破片のほぼ完形のものが多く出土している。中世土器は概ね平安時代末から鎌倉時代（11世紀から13世紀）のものが多い。本報告書では、出土遺物のうち遺存状態が良好な実測・記録可能な遺物180点を抽出した。

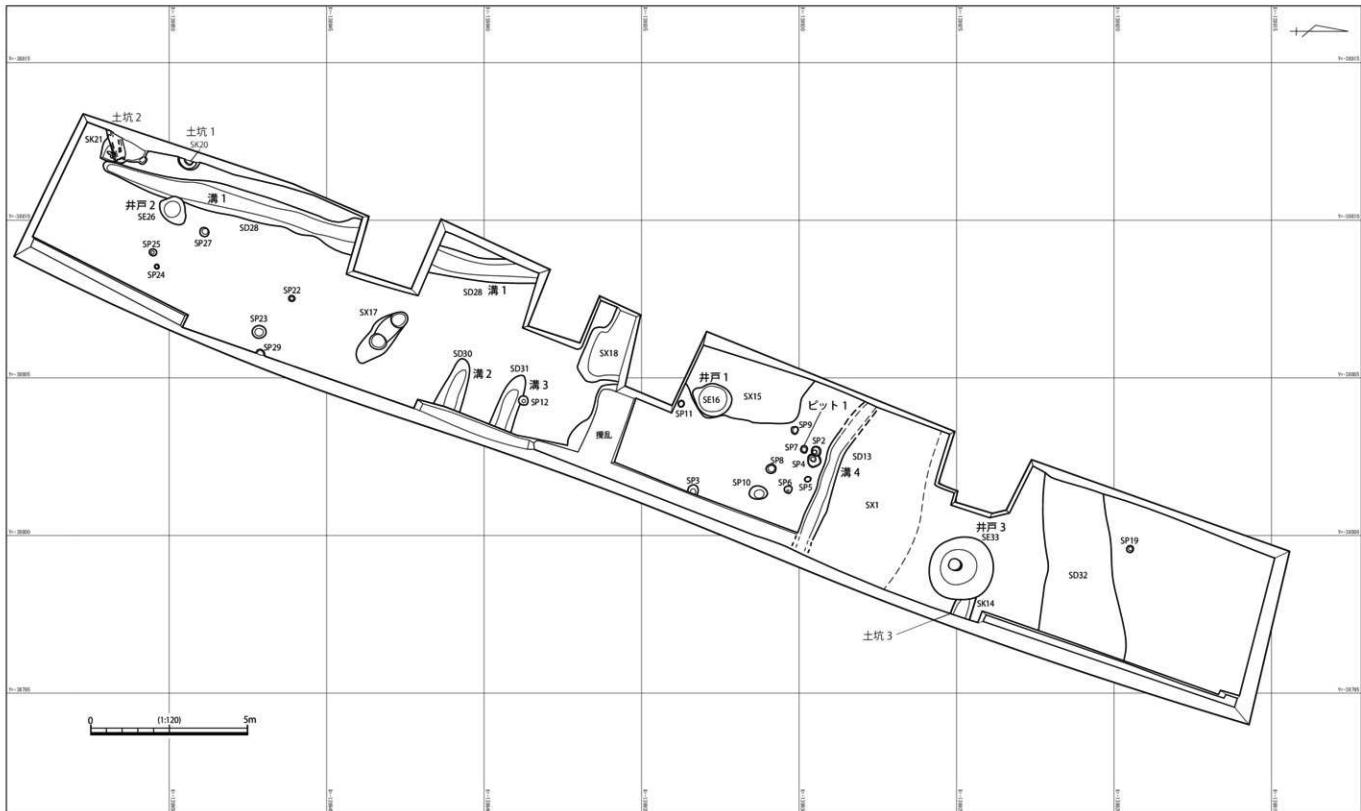
2 古墳時代

■井戸1（SE16）（第7図：写真5）

位 置：調査区のほぼ中央に位置し、S X 15を切って掘削されている。遺構確認面の高さは標高0.98mである。



第5図 調査区東壁土層断面図



第6図 調査区平面図

形 態：掘方の平面形は、ほぼ円形で、断面形は深い皿状をしている。底面は平坦でやや急に立ち上がる。

規 模：長軸 1.27 m、短軸 1.03 m で、上層は削平されているが、検出できた深さは 0.41 m を測る。

土 層：灰色粘土を主体としているが、下層の色が暗い 2 層に分けられる。

出土遺物：土師器、須恵器が出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物 10 点を抽出した（遺物番号 1 ~ 10）。

遺構時期：出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。

■井戸 2 (SE26) (第 8 図: 写真 6)

位 置：調査区の南側に位置し、溝 1 を切って掘削されている。遺構確認面の高さは標高 0.98 m である。

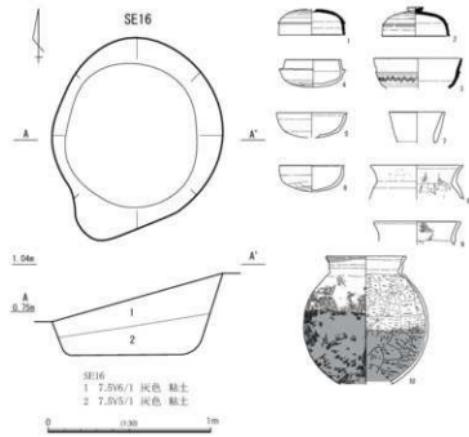
形 態：掘方の平面形は、ほぼ円形で、断面形は深い皿状をしている。底面は平坦でやや急に立ち上がる。

規 模：長軸 0.94 m、短軸 0.78 m で、上層は削平されているが、検出できた深さは 0.40 m を測る。

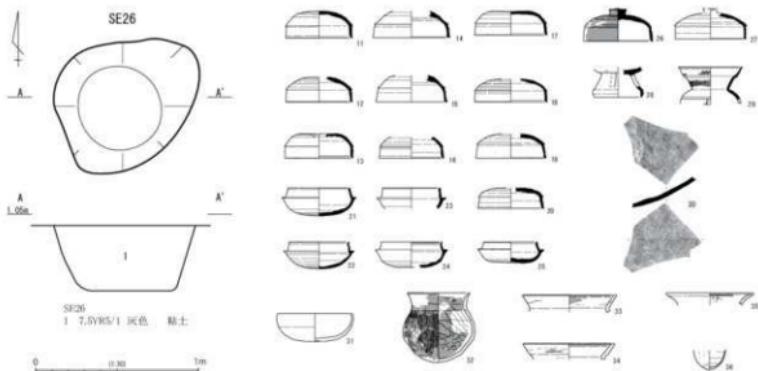
土 層：灰白粘土の単層である。

出土遺物：土師器、須恵器が非常に多く出土した。土師器には製塙土器が含まれ、須恵器は蓋環がほとんどであるがはそもそも 1 点出土している。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物 26 点を抽出した（遺物番号 11 ~ 36）。

遺構時期：出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。



第 7 図 井戸 1 (SE16)



第 8 図 井戸 2 (SE26)

■土坑1 (SK20) (第9図:写真7)

位 置: 調査区の南端部の西壁沿いに位置する。土坑2の北側に近接する。遺構確認面の高さは標高1.00mである。

形 態: 平面形は半円形で、断面形は凹字状で底面は平坦である。断面観察から、柱痕とみられる層が検出され、掘立柱建物の柱跡と推測される。

規 模: 検出された範囲での規模は、長軸0.69m、短軸0.29m以上、深さ0.41mを測る。

土 層: 最上層は褐灰色粘質シルトであるが、他は黒色粘土を主体とし、概ね6層に分けられる。

出土遺物: 土師器片、須恵器片が少量出土した。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。

■土坑2 (SK21) (第10図:写真8.9)

位 置: 調査区の南端部の西壁沿いに位置する。土坑1の南側に近接し、溝1を切って掘られている。遺構確認面の高さは標高0.83mである。

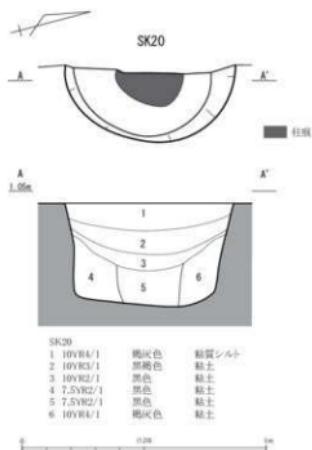
形 態: 平面形は不定形で、断面形は深い皿状で外側は急に立ち上がる。底部は平坦であるが、一部凹字状に窪んでいる。最上層から木製扉板が出土し、その下にはほぼ完形の土師器壺1点が埋納されていた。木製扉板は木棺に転用された部材とみることができ、木棺直葬墓の可能性がある。土師器壺の中から遺物は見つからなかった。

規 模: 検出された範囲での規模は、長軸1.46m、短軸0.76m以上、深さ0.64mを測る。

土 層: 灰色粘土を主体とするが、3層に概ね分けられる。

出土遺物: 木製扉板、土師器壺のほか、非常に多くの土師器、須恵器が出土した。土師器は壺のほかに製塙土器が多く含まれており、須恵器は蓋壺のほかに高環の大破片が出土している。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物32点を抽出した(遺物番号37~68)。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。



第9図 土坑1 (SK20)

■溝1 (SD28) (第11図:写真10)

位 置: 調査区の南側、西壁沿いに南北に伸びる。北端は調査区外に伸びている。遺構確認面の高さは標高0.89mである。主軸方向はN-15°-Eを示す。

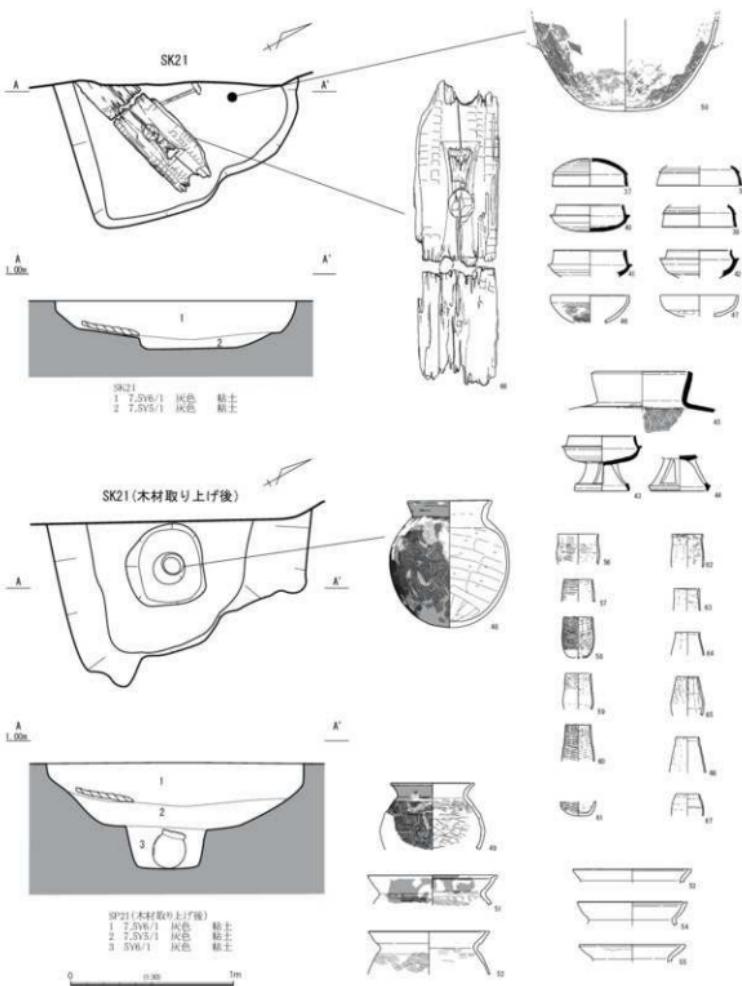
形 態: 平面は溝状で、断面は歪な皿状をしている。

規 模: 調査区外に伸びているため、全長は不明であるが、検出した長さ15m以上、幅0.92m、深さ0.33mを測る。

土 層: 上層が灰色砂質シルト、下層が灰色粘土を主体とする2層に分けられる。下層は炭混じりで、帯状に細粒砂が混じっていた。

出土遺物: 土師器、須恵器の破片が少量出土するほか、土師器質土器や陶器が出土した。(遺物番号69・70)。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられるが、井戸2、土坑2に切かれていることから、これらの遺構より若干前に埋没したと推定される。



第10図 土坑2 (SK21)

■溝2 (SD30) (第11図:写真11)

位 置: 調査区中央から南側に位置する。溝3と並行して掘られており、東端は調査区外に伸びている。遺構確認面の高さは標高 1.20 m である。主軸方向は N-72°-W を示す。

形 態: 平面形は溝状で、断面形は南側がなだらかなU字状をしている。

規 模: 調査区外に伸びているため、全長は不明であるが、検出された長さ 2 m 以上、幅 0.66 m、深さ 0.27 m を測る。

土 層: 上層から黄褐色中粒砂、黄灰色細粒砂、灰色細粒砂の3層に分けられる。

出土遺物: 上師器片が少量出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物2点を抽出した（遺物番号71・72）。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。

■溝3（SD31）（第11図：写真11）

位 置: 調査区中央に位置する。溝2と並行して掘られており、S P 12に北側を一部切られている。東端は調査区外に伸びている。遺構確認面の高さは標高1.12mである。主軸方向はN-69°-Wを示す。

形 態: 平面形は溝状で、断面形は深い皿状をしている。

規 模: 調査区外に伸びているため、全長は不明であるが、検出された長さ2m以上、幅0.76m、深さ0.09mを測る。

土 層: 灰黃褐色砂質シルトの単層である。

出土遺物: 上師器、須恵器が多く出土した。須恵器片は形が良好に残存していた。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物5点を抽出した（遺物番号73～77）。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期末と考えられる。

3 中世

■井戸3（SE33）（第12図：写真12.13）

位 置: 調査区の北側、SD 32の南側に位置する。遺構確認面の高さは標高0.83mである。

形 態: 掘方の平面形は円形で、断面形は深い皿状をしている。底板を抜いた直径約50cmの曲物を10段重ねて井戸側として転用している。

規 模: 掘方の直径2.0m、最下層は湧水のため、図化できた深さは約0.65mであるが、実際の規模はもう少し深い。

土 層: 灰白色粗粒砂の単層である。

出土遺物: 上師器皿・瓦器椀・白磁皿・曲物が出土した。底部から形が良好に残った上師器皿や和泉型瓦器椀が多く出土しているが、楠葉型瓦器椀・大和型瓦器椀もわずかに出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物36点を抽出した（遺物番号78～113）。

遺構時期: 底板を抜いた曲物を井戸側として転用する例は平安時代後期から鎌倉時代後期によくみられ、出土した遺物からも、本遺構の埋没時期は中世と考えられる。

■溝4（SD13）（第13図）

位 置: 調査区の北側から中央部に位置し、東西に伸びている。両端は調査区外に伸びている。遺構確認面の高さは標高1.00mである。主軸方向はN-63°-Wを示す。

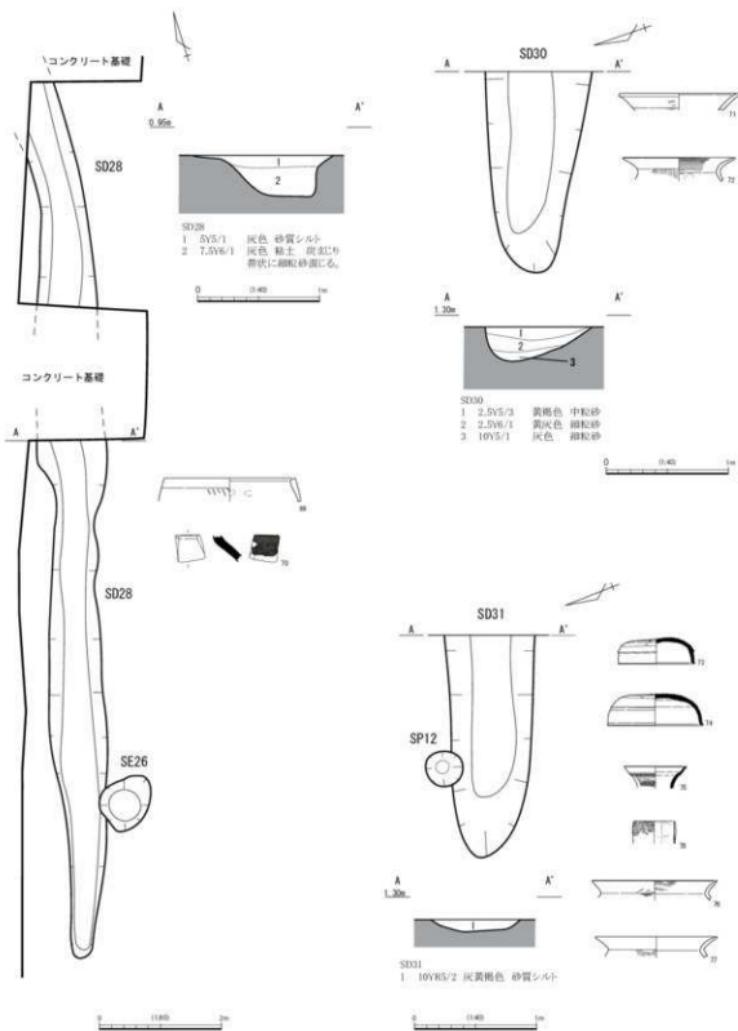
形 態: 平面形は溝状で、断面形は深い皿状をしている。

規 模: 調査区外に伸びているため、全長は不明であるが、検出された長さ5m以上、幅0.52m、深さ0.19mを測る。

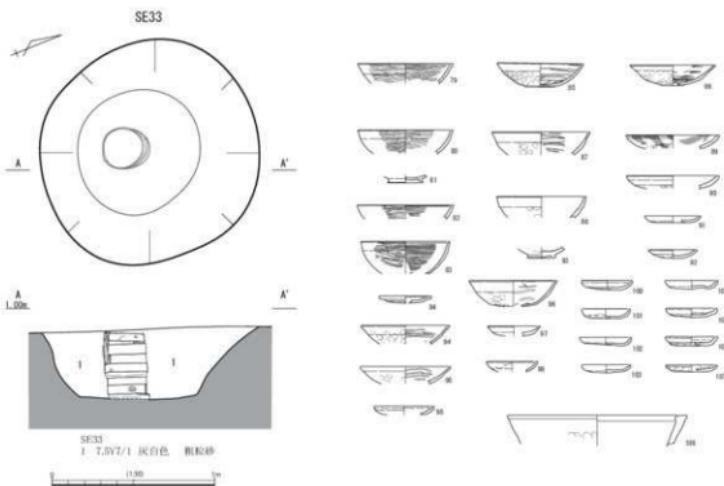
土 層: 灰黄色粗粒砂の単層である。

出土遺物: 上師器、須恵器、瓦器片が少量出土した。

遺構時期: 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は中世と考えられる。



第11図 溝1・2・3 (SD28・30・31)



第12図 井戸3 (SE33)

■ピット1 (SP7) (第14図:写真14.15)

位 置:調査区中央やや北よりのピット群の中に位置する。

遺構確認面の高さは標高0.99mである。

形 態:平面形は円形で、断面形は浅い皿状をしている。周辺の同一面から同規模、同埋土のピットが複数検出されているが、土師器皿が埋納されていたのはこの遺構だけである。

規 模:長軸0.23m、短軸0.21m、深さは0.03mを測る。

土 層:灰色砂質シルトの単層である。

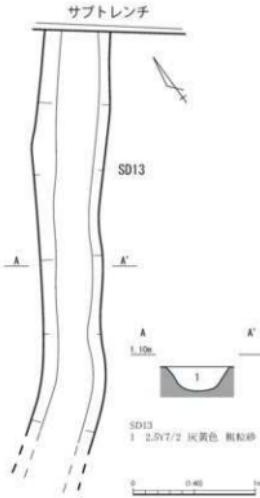
出土遺物:土師器皿が重なり合うように複数枚出土した。遺存状態は非常に良好で人為的に埋納されたと考えられる。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物10点を抽出した(遺物番号114~123)。

遺構時期:出土した遺物から、本遺構の埋没時期は中世と考えられる。

4 時期不明

■土坑3 (SK14) (第14図:写真16)

位 置:調査区北側の東壁沿いに位置する。SD32の南側、井戸3の東側に近接する。調査区東壁側溝掘削中に遺物が一括で出土したことにより検出した。遺構確認面の高さは標高0.83mである。



第13図 溝4 (SD13)

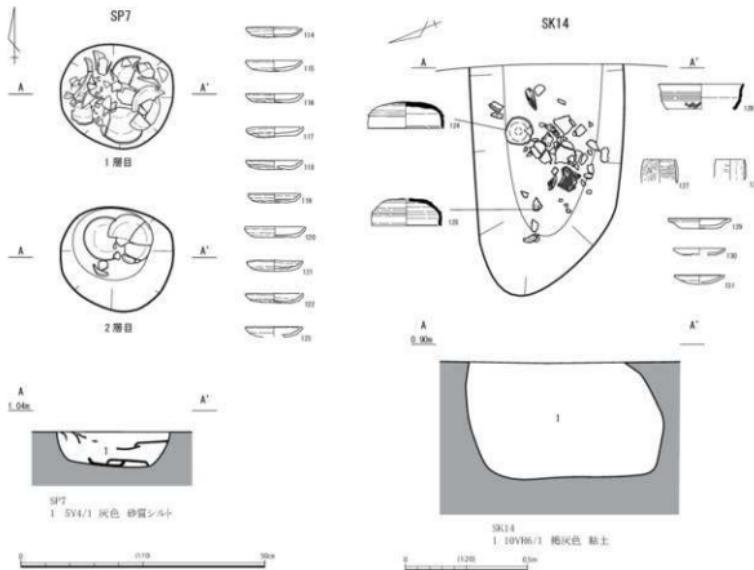
形態: 平面形は半分切られた楕円に近い不定形で、断面形は袋状で底部は平坦である。

規模: 検出された規模は長軸 0.93 m 以上、短軸 0.51 m、深さ 0.47 m を測る。

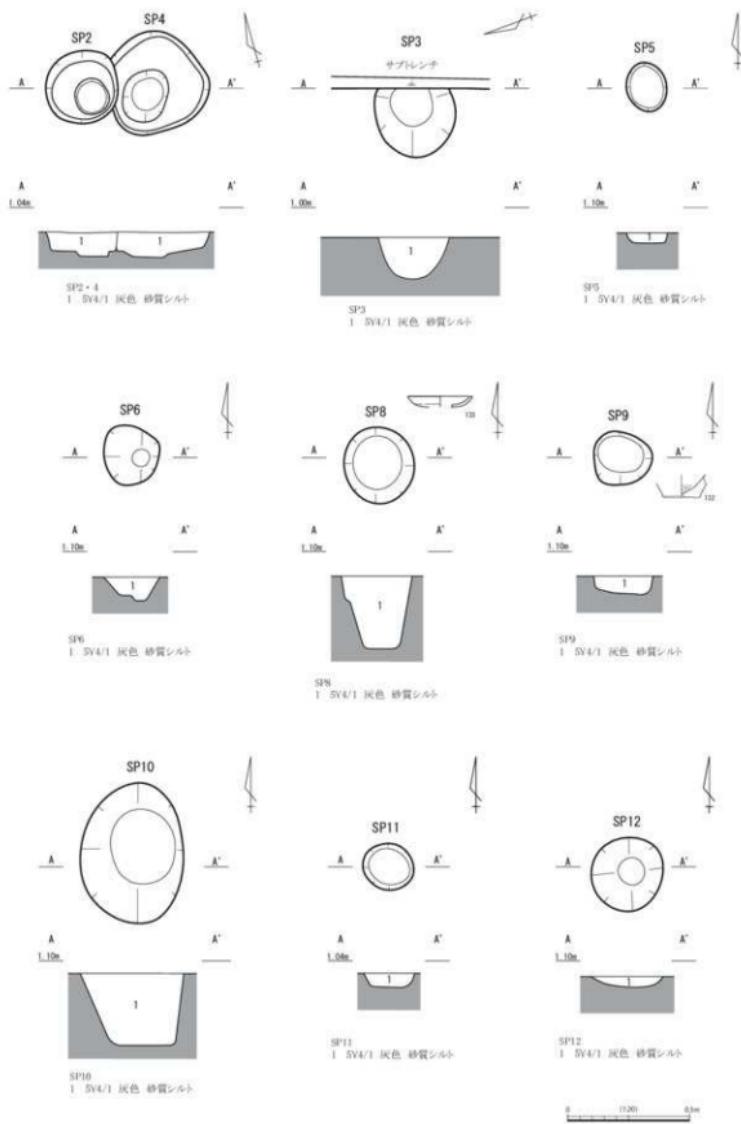
土層: 褐灰色粘土の単層である。

出土遺物: 土師器、須恵器がまとまって出土した。土師器には製塙土器が含まれている。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な遺物 8 点を抽出した（遺物番号 124～131）。

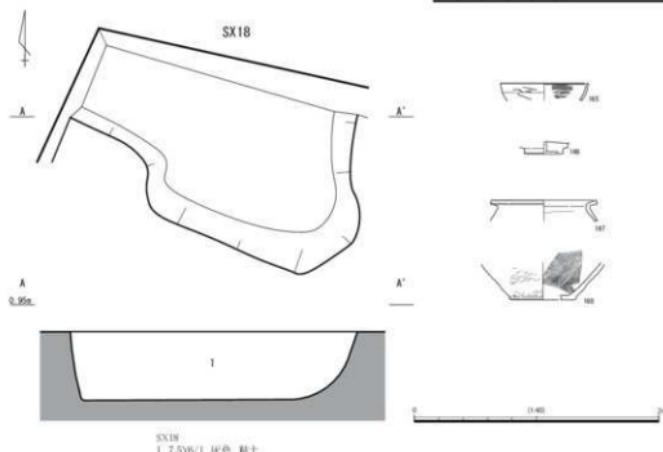
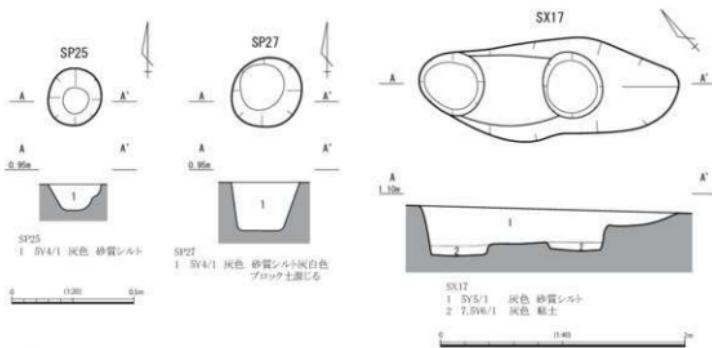
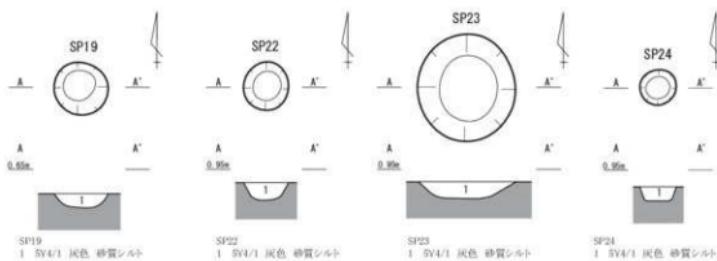
遺構時期: 出土した遺物は古墳時代のものであるが、東壁断面観察から、この遺構のみ他の遺構検出より上層の第 5 層上面より検出されているため、後の段階で出土した遺物を新たに投棄した際に埋め戻されたと推測される。



第 14 図 ピット 1 (SP7)・土坑 3 (SK14)



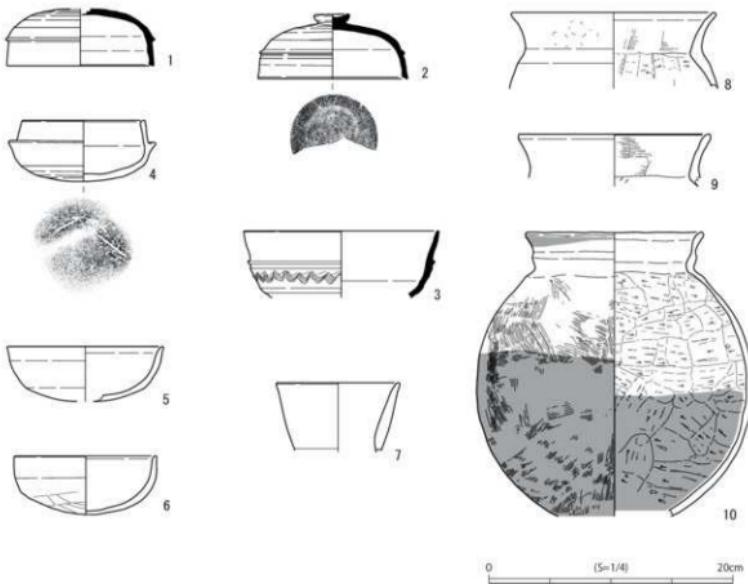
第15図 ピット群



第16図 ピット群と不明遺構

5 出土遺物

井戸 1 SE16



第 17 図 井戸 1 (SE16) 出土遺物

■井戸 1 (SE 16) 出土遺物 (第 17 図)

1 は須恵器有蓋高環の蓋である。全体の 1/4 程度が残る。胎土は白色砂粒を少量含み精良である。体部の口縁端部は内傾しわずかに段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的シャープである。天井部は丸みを帯び、器高が口径の割に高い印象を受ける。天井部中央のつまみははがれて遺存していない。TK23・47 号窯出土品併行とみられる。

2 は須恵器有蓋高環の蓋である。全体の 1/2 程度が残る。胎土は砂粒を少量含み精良である。体部の口縁端部内面は内傾し明瞭な段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的シャープである。天井部は丸みを帯び、器高が口径の割に高い印象を受ける。天井部外面に灰がかぶり、その中央に中くぼみのつまみがつく。TK23・47 号窯出土品併行とみられる。

3 は須恵器無蓋高環の環部である。環部の 1/4 程度が残るが脚部を欠く。胎土は白色砂粒やチャート粒を含み精良である。少し外反気味の口縁端部は丸くおさめる。口縁部と底部とを分ける稜は少し鋭さに欠け、その下に櫛描き波状文を施す。139 の無蓋高環と比べると、口径は大きく器高も高い。また、口縁端部の形状も異なる。TK23・47 号窯出土品併行とみられる。

4は土師器蓋の坏身である。本品は成形や調整に須恵器の技法を用い、器形も須恵器のそれであるが、土師器として焼成されていることから土師器とした。たちあがりが1/5程度残る以外、ほぼ完形である。底部は丸みを帯び、内傾気味のたちあがりで、その端部は少し丸みを帯びた内傾面を持つ。底部外面にヘラや櫛状工具による陰刻をみとめるが、意図的なものかどうかはわからない。

5は土師器环である。口縁部から底部上位にかけて小片が残る。器壁全体に劣化が進んでいる。直立気味の口縁部で、端部は丸く収める。体部上半はそれほど丸みは帶びない。环の内面はナデて平滑に仕上げる。色調や質感は6に類似する。

6は土師器环である。ほぼ完形である。直立気味の口縁部で、端部内面は少し内傾し横ナデして丸く収める。体部上半はそれほど丸みは帶びない。底部は安定のよい丸底である。环の内面は丁寧に横ナデし平滑に仕上げる。外面上半は横ナデし、下半から底部は丁寧なヘラケズリとヘラナデを施し、平滑に仕上げている。他の土師器环に比べ、全体にシャープで精細な印象を受ける。

7は土師器壺である。口縁部の小片が残る。胎土は砂粒を含むが比較的精良である。口縁部は外上方に開き、口縁上端は薄くなる。内外面とも横ナデし平滑に仕上げる。

8は布留形の土師器壺である。口縁部から肩部にかけての小片で、色調は少し黄味がかった灰白色で胎土は砂粒を含むが精良である。口縁部は少し外反して外上方に開き、外面とも横ナデし平滑に仕上げる。口縁端部は少し内傾してあまり肥厚せず、狭い面を持つ。肩部外面はナデて平滑にし、内面は横位に小刻みに削る。本品は9と同一個体である可能性が高い。

9は布留形の土師器壺である。口縁部の小片で、色調は少し黄味がかった灰白色で胎土は砂粒を含むが精良である。口縁部は少し外反して外上方に開き、口縁端部は少し内傾してあまり肥厚せず、狭い面を持つ。内外面とも横ナデし平滑に仕上げる。本品は8と同一個体である可能性が高い。

10は土師器壺である。口縁から底部まで全体の1/3程度が残る。口縁部は少し外反氣味に直立し、頸部が絞り気味に肩部へ続く独特の形状である。体部の形状は球形で最大径はその中ほどにある。体部外面には縦位～斜位にハケ目を施す。体部内面は上半部が横位中心、下半部は斜位中心にケズる。また、体部上半と下半はそれぞれ分割成形したものを接合したものと思われ、接合部にはわずかにユビオサエが残る。なお、本品はいわゆる山陰系の可能性が高い。

■井戸2(S E 26) 出土遺物(第18図)

11は須恵器蓋環の蓋である。体部の一部を欠ぐが、ほぼ完形である。胎土は少量の白色砂粒を含むが精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的鋭い。天井部は丸みを帯び、器高が口径の割に高い印象を受ける。なお、体部から天井部外面はほぼ全面に灰がかぶる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

12は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/4程度が残る。胎土は少量の白色砂粒を含むが精良である。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的鋭い。天井部はかなり丸みを帯び、器高が口径の割に高い印象を受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

13は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/2程度が残る。胎土は少量の白色砂粒を含むが精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、鋭い。天井部は丸みを帯びる。なお、体部から天井部外面は灰がかぶり、重ね焼きの痕がみとめられる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

14は須恵器蓋環の蓋である。天井部と体部の小片が残る。胎土は砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部は丸い形状が復元される。本品は、体部が他の個体と比べると明らかに大きく、このことから時期が降るMT15号窯出土品併行とみられる。

15は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/5程度が残る。胎土は少量の砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は内傾してわずかに段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は、短く比較的鋭い。また、外面が瓦質気味に焼成されている。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

16は須恵器蓋環の蓋である。天井部と体部の小片が残る。胎土は精良で、口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く比較的鋭い。焼成は良好で、堅致な印象を受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

17は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/3程度が残る。胎土はほとんど砂粒を含まず精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的鋭い。天井部は丸みを帯び、器高が口径の割に高い印象を受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

18は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/5程度が残る。胎土はほとんど砂粒を含まず精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、鋭い。天井部は丸みを帯びる。22同様、色調が全体に黒みががっており、堅致に焼成される。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

19は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/4程度が残る。胎土は少量の砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く角が少しあまい。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

20は須恵器蓋環の蓋である。天井部と体部の小片が残る。胎土は砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は少し内傾してわずかに段を持つ。天井部は扁平な形状である。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

21は須恵器蓋環の杯である。全体の1/3程度が残る。胎土は黒色粒のほか、わずかに砂粒を含み精良である。たちあがりは内傾気味で、その口縁端部内面は内傾してわずかに段を持つ。底部は丸みを帯びる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

22は須恵器蓋環の杯である。全体の1/4程度が残る。胎土は白色砂粒を含むが精良である。たちあがりは少し内傾気味で、その口縁端部内面は内傾して段を持つ。底部は丸みを帯びる。18同様、色調が全体に黒みががっており、堅致に焼成される。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

23は須恵器蓋環の杯である。たちあがりの小片が残る。胎土は少し粗い。たちあがりは少し内傾気味で、口縁端部内面はほとんど内傾せず、わずかに段を持つ。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

24は須恵器蓋環の杯である。全体の1/3程度が残る。胎土はわずかに砂粒を含み精良である。たちあがりは内傾気味で、その口縁端部内面は内傾して段を持つ。焼成は良好で、堅致な印象を受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

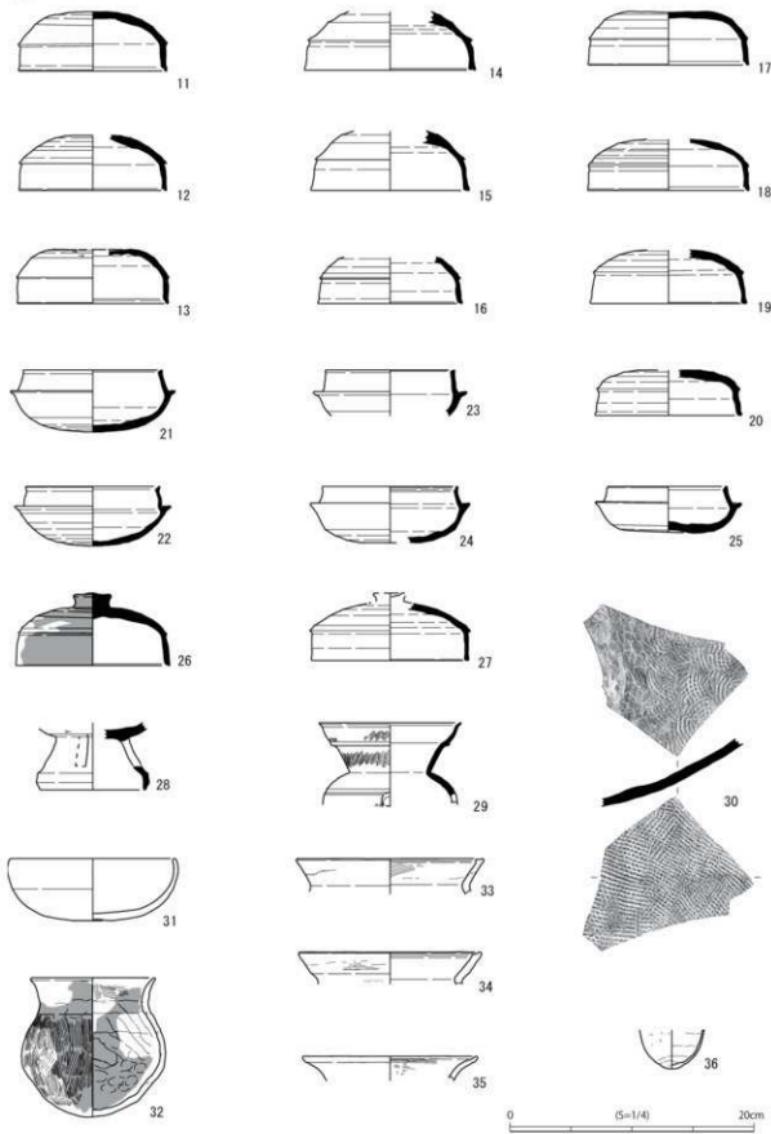
25は須恵器蓋環の杯である。全体の2/3程度が残る。胎土はほとんど砂粒を含まず精良である。たちあがりは内傾気味で、その口縁端部内面は内傾してわずかに段を持つ。底部は扁平で、底部の粘土円盤に沿って体部がはがれている様子がみとめられる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

26は須恵器有蓋高环の蓋である。口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。胎土は砂粒をほとんど含まない。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、比較的シャープである。天井部は丸みを帯び、中央に中くぼみのつまみがつく。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

27は須恵器蓋環の蓋である。全体の1/4程度が残る。胎土は少量の砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く比較的鋭い。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

28は須恵器有蓋高环の脚部である。脚部の1/4程度が残るが杯部を欠く。胎土は砂粒をほとんど含まない。長方形の三方透かしをもつ短い脚部で、内外面とも丁寧にナデている。脚部の端部は丸くおさめ、シャープさに欠ける形状である。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

井戸 2 SE26



第18図 井戸 2 (SE16) 出土遺物

29は須恵器はそうである。口頭部から肩部にかけての小片で、外上方へひろがる口頭部を有し、頸部外面にはこまかい櫛描波状文をめぐらす。肩部にはヘラ描き沈線を一条めぐらし、その沈線直下にも櫛描き波状文の文様帶があり、そこに円孔が穿たれている。口頭部の内外面と肩部外面に自然軸がみとめられる。なおTK23号窯出土品に類似品がある（『陶邑古窯址群I』図版三五20）。

30は須恵器甕の底部である。底部から体部下位にかけての小片で、底部円板の一部ははがれている。焼成は良好で堅致である。外面は乱方向に並行タタキ目文を認めるが、叩き板の木目が浮き出て格子状にみえる。内面は同心円文を消して目立たなくしている。

31は土師器坏である。全体の1/2程度が残る。内湾気味の口縁部で、端部は横ナデして丸く収める。体部は底部へ湾曲し、安定のよい丸底である。坏の内面は丁寧に横ナデし平滑に仕上げる。外面上半は横ナデし平滑に仕上げる。下半から底部は指おさえのちケズリとナデを施すが他の部位に比べ仕上げは少し粗い。

32は土師器甕である。口縁部は1/4程度残り、体部は破片を接合し1個体に復元できた。厚手で粗製な印象を受ける。外面全体に煤が付着しているが、器壁の劣化や劣化は進んでいない。口縁部は外反する口縁で、その内外面とも横ハケと横ナデを施し、口縁外端部はわずかに肥厚させて丸く納める。体部は球形で、外面はおむね縱斜位方向にハケ目を施し、内面は粗く削ったのちナデ調整を行う。底部は丸底で外面はヘラナデし平滑に仕上げている。本品は、煮炊に使われていたことから甕としたが、いわゆる小型丸底壺の系譜を引くものと思われる。器壁の劣化状態からは、日常の煮炊具としての長期間にわたる使用は考えにくい。また本品特有の使用痕跡として、最大径付近で一部が丸く赤変していること、体部内面の変色域が斜行して口縁に対し平行しないこと、などが観察され注意をひく。何らかの目的で土器を斜めに置いて火にかけ、使用後まもなく廃棄したのであろうか。今後、類例の報告を待ちたいと思う。

33は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は少し黄味がかった灰白色で、胎土は砂粒を含み少し粗い。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げるが、内面の一部に横ハケが残る。口縁端部の肥厚部はさほど内傾しない。

34は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は少し赤味がかった灰白色で、胎土は砂粒を含み少し粗い。口縁部は横ナデし、外上方に軽く内湾しながら開く。口縁端部は内傾して少し肥厚する。

35は布留形で小型の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は淡灰橙色で胎土は精良である。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げるが、内面に横ハケが残る。口縁端部の肥厚部は丸くおさめており面を持たない。

36は製塙土器である。底部のみ3/4程度が残る。精良な胎土で、少し尖底な器形である。外面はナデで掌痕を消し、平滑にしている。内面も横ナデし平滑である。

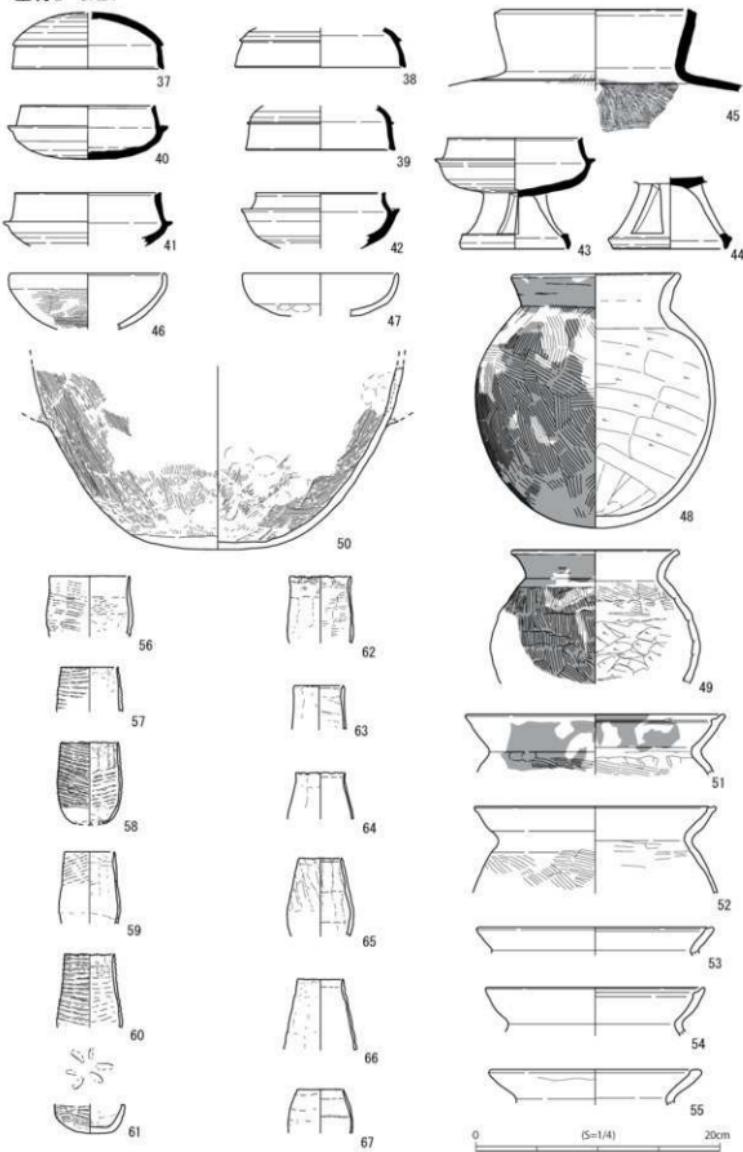
■土坑2（SK21）出土遺物（第19・20図）

37は須恵器蓋坏の蓋である。全体の1/2程度が残る。胎土は白色砂粒を少量含み精良である。口縁端部内面は内傾してわずかに段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、少しシャープさに欠ける感じを受ける。天井部は丸く仕上げている。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

38は須恵器蓋坏の蓋である。体部と天井部の小片が残る。胎土はごく少量の白色砂粒を含み精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、少しシャープさに欠ける感じを受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

39は須恵器蓋坏の蓋である。体部と天井部の小片が残る。胎土は少量の白色砂粒を含み精良である。

土坑2 SK21



第19図 土坑2 (SK21) 出土遺物1

口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は小さく鋭く突出する。TK208号窯出土品併行とみられる。

40は須恵器蓋環の环である。全体の1/2程度が残る。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。环部のたちあがりはさほど内傾しておらず、その口縁端部は内傾してわずかに段を持ちシャープに仕上げる。器高はさほど高くなく扁平気味である。器形・質感等が43の有蓋高环に類似的印象を受ける。本品は精良な胎土で仕上がりがシャープであるなどの点から、より古いTK208号窯出土品併行の可能性が高い。

41は須恵器蓋環の环である。たちあがりから体部にかけての1/4程度が残る。胎土は砂粒をほとんど含まない。たちあがりはさほど内傾しておらず、口縁端部内面は内傾して段を持ちシャープに仕上げる。内面は還元化が不十分で赤色味を帯びる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

42は須恵器蓋環の环である。たちあがりと体部の小片が残る。胎土は少量の砂粒を含み、少し粗い。たちあがりは他と比べて少し低く屈曲が強い印象を受ける。その口縁端部内面は内傾して面を持つ。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

43は須恵器有蓋高环である。全体の1/2程度が残る。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。环部のたちあがりはさほど内傾しておらず、その口縁端部はわずかに内傾してわずかに段を持ちシャープに仕上げる。环部の器高はさほど高くなく扁平気味である。脚部は細い長方形の三方透かしを持つ短いもので、内外面とも丁寧にナデている。脚部の端部上端は稜があり、シャープな形状である。なお、环底部外面から脚部内外面は灰がかぶる。器形・質感等が40の环に類似的印象を受ける。本品は精良な胎土で仕上がりがシャープであるなどの点から、より古いTK208号窯出土品併行の可能性が高い。

44は須恵器有蓋高环の脚部である。脚部の2/3程度が残るが环部を欠く。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、わずかに瓦質に仕上がっている。面取りを施した、三角形の三方透かしをもつ短い脚部で、内外面とも丁寧にナデしている。脚部の端部は細く比較的シャープな印象である。本品は脚部の胎土にチャート粒を含んでおり、环部と異なる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

45は須恵器甕である。口縁部の1/4と体部のごく一部が残る。少し外へ直線的に開く口縁部で、端部は少し外傾した面を持つ。体部外面は自然釉がかかり判然としないが平行タタキ目文があり、また内面は同心円文を消している。本品はTK208号窯出土品に類似のものがあり（『陶邑古窯址群I』図版一二41、図版三四40）、直口甕とみられる。

46は土師器环である。口縁部から底部上位にかけて小片が残る。器壁全体に劣化が進んでいる。内湾気味の口縁部で、横ナデし端部は丸く收める。体部外面の上方は横ハケ、以外は乱方向にハケ調整を施す。环の内面は平滑に仕上げる。

47は土師器环である。口縁部から底部上位にかけて1/4が残る。器壁全体に劣化が進んでいる。直立気味の口縁部で、端部は丸く收める。体部上半はそれほど丸みは帶びない。环の内面はナデで平滑に仕上げる。色調や質感は6に類似する。

48は土師器甕である。ほぼ完形で口縁部の一部を欠く。口縁部は短く外反する口縁で、内外面とも横ハケと横ナデを施し、端部は肥厚せず丸く納める。体部は球形で外面はおおむね縱斜位乱方向に粗いハケ目を施し、内面は斜位に粗く削ったのちナデる。底部は丸底で外面はヘラナデし平滑に仕上げている。

49は土師器甕である。口縁部のみ1/2程度と体部の小片で、外面全体に煤が付着する。器壁は厚く、幅2cmほどの粘土巻き上げ痕が体部内面に明瞭に残っており、劣化は進んでいないが粗製な印象を受ける。口縁部は外反しながら開き、丸くおさめた端部外面は横ナデのためわずかに面を持つ。体部外

面は縦斜位のハケ調整を行い、内面は粗くケズリ調整を行う。また、頸部内面の一部にハケ調整がみとめられる。

50は土師器把手付甕である。上半部は遺存していない。胎土は精良で焼成は良好である。体部外側は縦位～斜位にハケ目を、体部内面は横位～斜位にハケ目を施す。把手は体部の二ヶ所に対置するところ、把手本体は残っておらず一ヶ所のみ体部に挿入された痕跡が残る。底部は安定のよい丸底である。なお、把手遺存部の周辺に赤色塗彩がみられた。

51は布留形の土師器甕である。口縁部から頸部の小片で、色調は少し黄味がかった灰白色で胎土は少し粗い。口縁部は外上方に軽く内湾しながら開き、口縁端部は内傾する肥厚部の面をかなり拡張させる。頸部内面は粗くナデした後、斜位のハケを認める。外面は縦横位の粗いハケ調整を行う。

52は布留形の土師器甕である。口縁部から体部の小片で、器壁は部分的に劣化が進み調整は不明瞭である。口縁部は外上方に軽く内湾しながら開き、端部は内面に少し肥厚しその上部に面を持つ。体部外面は斜位のハケ調整を行う。

53は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は内面が少し赤味がかった淡灰褐色で胎土は砂粒を含み少し粗い。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げるが、内面の一部に横ハケが残る。口縁端部は内傾して肥厚し、面を持つ。

54は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は淡灰褐色で胎土は砂粒を含み少し粗い。器壁に少し劣化がみられ、厚ぼったい印象を受ける。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げるが、内面の一部に横ハケが残る。口縁端部は少し内傾して肥厚し、面を持つ。

55は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は淡灰褐色で胎土は砂粒を含み少し粗い。口縁部は外上方に軽く内湾しながら開き、内外面とも横ナデで仕上げるが、内面の一部に横ハケが残る。口縁端部は内傾する肥厚部の面を拡張させる。

56は製塙土器である。口縁部を欠く体部下半の小片である。器壁は薄く外面にタタキ目がつきごく一部が剥離している。また劣化が進みその他の調整は不明瞭である。

57は製塙土器である。口縁部の小片で、60と同じく外面全体にタタキ目がつく。内面はナデ調整し平滑である。

58は製塙土器である。全体の1/4程度が残るが底部のほとんどを欠く。縦につまみ上げた薄い口縁で内側に成形の際のシボリ目がみとめられる。口径にくらべ深い体部で少し腰が張り、外面にタタキ目がつく。内面はナデで平滑である。また底部は丸いが平底気味である。

59は製塙土器である。口縁部から体部の小片で、劣化が進み器壁の調整は不明瞭である。口径にくらべ深い体部で少し腰が張り、外面にタタキ目がつく。

60は製塙土器である。口縁部から体部上半にかけて1/4程度が残る。腰が張る器形で口縁部外面まで全体にタタキ目がつく。口縁部内側に成形の際のシボリ目がみとめられる。内面は横ナデし平滑であるが鈍くタタキ目が残る。

61は製塙土器である。底部のみの完形だが体部から口縁部を欠き、粘土巻き上げ部分で擬口縁をなす。底部は粘土板に6ヶ所切り込みを入れて中央で重ね、指おさえにより成形している。底部内面は平滑で、粘土板切り込み部の接合痕が放射状に残る。体部は別に成形し、底部を外側からかぶせるように接合しているため、体部に比べ底部から接合部の器壁は厚い。また体部外面にはタタキ目がつく。

62は製塙土器である。口縁部から体部にかけての小片である。器壁は薄く精良な胎土である。口径にくらべ深い体部で腰が張る器形である。体部外面にはタタキ目はなく、内面は127のような貝殻状痕跡の横位の調整の後、横ナデし平滑に仕上げている。

63は製塙土器である。口縁部の小片で、器壁は薄く精良な胎土である。外面は指頭でていねいに押さえる。内面も横ナデし平滑である。

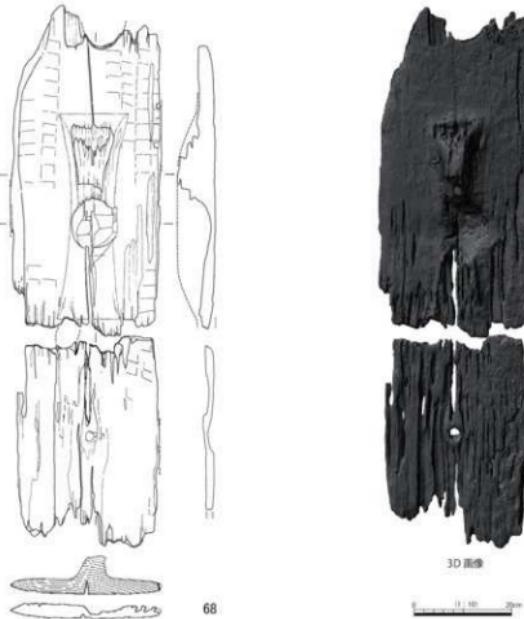
64は製塙土器である。口縁部から体部上半にかけての小片である。縦につまみ上げた薄い口縁で、赤色味を帯びた外面は一部を残して剥離し、灰色に変色している。内面は横ナデし平滑である。

65は製塙土器である。全体の1/3程度残るが底部を欠く。縦につまみ上げた薄い口縁で内側に成形の際のシボリ目がみとめられる。口径にくらべ深い体部で少し腰が張り、外面は縦位のケズリ痕が付く。色調は基本的に体部内外面とも赤色味が強いが、内面の下半部が黒変しており、それに対応する外面は退色し、器壁が剥離していることに注意される。

66は製塙土器である。口縁部から体部の1/4程度が残るが底部を欠く。器壁は薄く精良な胎土である。口径にくらべ深い体部で少し腰が張る器形である。外面は指頭でていねいに押さえる。内面も横ナデし平滑である。

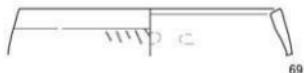
67は製塙土器である。口縁部を欠く体部下半の小片で、器壁は薄く劣化が進み調整は不明瞭である。内面に横位の粘土接合痕が残る。59に類似するがタタキ目はつかない。

68は木製扉板の一部である。扉の軸は遺存しておらず、扉板の上下端を切断して、他の何らかの部材に転用されたものである。材の中央部にある突起は門受けと思われるが、転用時にはここが削り込まれて原形を保っていない。また、材の両端の一部も二ヶ所穿孔されている。本木製品は共伴土器の年代観から古墳時代の扉板とみられるが、調査地近隣の出土例としては大阪府大東市所在北新町遺跡の例（大東市北新町遺跡調査会『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991）が知られる。この例を参考にすれば、本品も長さは不明であるが、幅40cm程度に復元しうる。



第20図 土坑2（SK21）出土遺物2

溝1 SD28



69



70

溝2 SD30



71



72

溝3 SD31



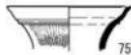
0

(S=1/4)

20cm



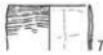
76



75



77



78

第21図 溝1・2・3 (SD28・30・31) 出土遺物

■溝1 (SD28) 出土遺物 (第21図)

69は土師質土器の炮烙である。口縁部から体部の小片が残る。口縁部は横ナデを施して平滑にし、口縁端部は内傾して面を持つ。体部外面は煤が付着し、斜位のタタキ目がみられる。

70は古瀬戸系陶器壺と思われる。頸部から肩部のごく小片が残る。外面は劣化しているが、灰釉が施され櫛描文がみとめられる。本品は外面の一部に半円形のはがれ痕があり、時期不明だが四耳壺である可能性が高い。

■溝2 (SD30) 出土遺物 (第21図)

71は土師器高环の環部である。口縁部から体部の小片である。胎土は細かな砂粒を含むが比較的精良である。口縁部内面は横ナデ、外面は斜位のハケ調整を行った後、横ナデを施す。口縁端部は少し外反して狭い面をつくり、その面の両側ににぶい稜をつくる。船橋遺跡O-I 土師器 121、122に類似するものか。

72は土師器甕である。口縁部から体部の小片である。口縁部内面は横位のハケ目、外面は横ナデを施し、端部は肥厚せず丸く納める。体部外面は縦位にハケ目を施す。

■溝3 (SD31) 出土遺物 (第21図)

73は須恵器蓋環の蓋である。口縁部と天井部の一部を欠くがほぼ完形である。胎土は白色砂粒を含み少し粗い。口縁端部内面は内傾してわずかに段を持つ。天井部と体部とを分ける棱は丸みを帯び、

鋭さに欠ける。天井部は扁平な印象を受ける。なお、天井部外面に十字のヘラ記号がしるされる。本品は径が小さいが、74 の個体に類似の印象を受けることから、時期がより下る MT15 号窯出土品併行とみられる。

74 は須恵器蓋坏の蓋である。口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。他の蓋と比べて本品は径が大きい。胎土は白色砂粒が少し多く含まれる。口縁端部内面は内傾して段を持ち、天井部は丸みを帯びる。天井部と体部とを分ける稜は短く、鋭さに欠ける。体部は丸みを帯びるが、径が大きい分扁平な印象を受ける。本品は、他の個体と比べ径が大きいことや少し粗い胎土などの点から、時期がより下る MT15 号窯出土品（以下、須恵器窯の名称は『陶邑古窯址群 I』の記載に従う。）併行とみられる。

75 は須恵器はそである。口頭部の小片で、外上方へひろがる口頭部を有し、頭部外面にはこまかい櫛描波状文をめぐらす。口頭部の外面に自然釉がみとめられる。本品は 19 に類似し、TK23・47 号窯出土品併行とみられる。

76 は土師器壺である。口縁部の小片である。胎土は砂粒を少量含むが精良である。口縁部は軽く外反しながら開き、端部は細く丸くおさめる。外面は横ナデを行い、内面は横ハケの後ナデで平滑にしている。

77 は土師器壺である。口縁部から頭部にかけての小片である。胎土は砂粒を少し含む。口縁部は外上方に少し外反しながら開き、口縁端部は肥厚せず薄くなる。口縁部は外面は横ナデ、内面には横ハケののち横ナデして仕上げる。

78 は製塩土器である。口縁部を欠く体部下半の小片で、器壁は薄く外面に比較的細かなタタキ目がつき一部剥離している。また劣化が進み調整は不明瞭である。

■井戸 3 (SE33) 出土遺物 (第 22・23 図)

79 は瓦器椀である。口縁部から体部上位にかけての小片である。外面は粗く太い分割ヘラ磨きを施すが、ヘラ削りは確認できない。内面のヘラ磨きは少し粗い印象を受ける。口縁端部は横ナデし丸くおさめる。本品は口縁部の形状や調整などから、II 期の和泉型とみられる。

80 は瓦器椀である。口縁部から体部上位にかけての小片である。外面は太いヘラ磨きを施すが、ヘラ削りは確認できない。内面は太いヘラ磨きを密に施す。口縁端部は横ナデし丸くおさめる。本品は口縁部の形状や調整などから、II 期の和泉型とみられる。

81 は瓦器椀である。高台の 1/2 程度が残る。外側に踏ん張る形状で、見込みは幅広いヘラ磨きが比較的密に施される。本品は遺構内で共伴する瓦器椀の時期、高台の形状や調整の特徴から II 期の和泉型とみられる。

82 は瓦器椀である。口縁部から体部上位の小片が残り、炭素吸着がなされていない。胎土は精良である。口縁端部は丸くおさめ、内面に一条の細い沈線を持つ。内面は密にヘラ磨きされる一方、外面のヘラ磨きは少し省略されておりヘラ削りはみられない。本品はその器形や調整の特徴から II 期の楠葉型とみられる。

83 は瓦器椀である。口縁部から体部の 1/6 程度が残る。胎土は精良である。口縁端部内面に段を持つ。また、内面は密にヘラ磨きされる一方で、外面のヘラ磨きの範囲は口縁部から体部上位にかけてで、省略化が進んでいる。本品は、その器形や調整の特徴から II 期の大和型とみられる。

84 は土師器皿である。全体の 1/6 程度が残り、色調は少し褐色がかかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施して少し屈曲し、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。外底面は不調整である。本品は 156 と同様の、ての字状口縁の小皿で器壁が厚くなる終末期の形態である。

85 は瓦器椀である。口縁部から体部の一部を欠くがほぼ完形。胎土は精良である。口縁端部は丸

くおさめる。低平な器形で、底部外面に形骸化した高台を貼り付けている。口縁部内面から体部内面にかけて渦巻状の幅広いヘラ磨きが、内底面に平行線状のヘラ磨きが施される一方、体部外面のヘラ磨きは省略されている。本品は、その器形や調整の特徴からⅢ期の和泉型とみられる。

86は瓦器椀である。全体の2/5程度が残る。胎土は少し砂っぽい。口縁端部は丸くおさめ、底部外面に低い高台を貼り付けている。器形は低平化が進み、内面にはかなり省略した連続渦巻状のヘラ磨きをみとめる。本品は、器形や調整などからⅢ期の和泉型とみられる。

87は瓦器椀である。口縁部から体部上位の小片が残る。胎土は少し粗い。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面から体部内面にかけて渦巻状の幅広いヘラ磨きが施される一方、体部外面のヘラ磨きは省略されている。本品は、その器形や調整の特徴からⅢ期の和泉型とみられる。

88は吉備系土師器椀である。口縁部から体部の小片が残り、色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部は少し外反して丸くおさめる。内面は横ナデで平滑に仕上げる。外面下半はユビオサエのみで不調整である。内外面ともヘラ磨きは省略されている。本品は瀬戸内方面からの搬入品であろう。

89は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。色調は少し褐色がかった灰白色で、胎土は少し粗い。内外面に煤が付着する。口縁部は横ナデを施し端部は丸くおさめ、外端面に横ナデは行わない。体部外面下位は不調整である。

90は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残り、色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は二段に横ナデを施し端部は丸くおさめ、外端面に横ナデは行わない。体部外面下位は不調整である。

91は土師器皿である。口縁部から底部の小片が残り、色調はわずかに赤味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は少し内湾気味に立ち上がり、横ナデを施して端部は丸くおさめる。見込みはナデ調整で平滑に仕上げる。外底面は不調整である。

92は土師器皿である。全体の1/4程度が残り、色調はわずかに赤味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを強く施して上面が外反する。口縁端部は肥厚せず丸くおさめる。外底面は不調整である。

93は白磁皿である。底部の1/2程度が残る。内面見込み部分の釉を輪状に搔き取っている。高台は底部外面を削ることで成形し、豊付けは磨いてなめらかにしている。本品は、大宰府条坊跡の出土例では白磁皿Ⅲ-1類とされる製品で、12世紀中頃に比定される。

94は瓦器椀である。口縁部から体部の小片が残る。胎土は精良である。口縁端部は丸くおさめる。低平な器形で、内面には渦巻状の幅広いヘラ磨きが施される一方、体部外面のヘラ磨きは省略されている。本品は、その器形や調整の特徴からⅢ期の和泉型とみられる。

95は瓦器椀である。口縁部から体部の小片が残る。胎土は砂粒を含み少し粗い。口縁端部は丸くおさめる。低平な器形で、内面には形骸化した渦巻状のヘラ磨きが施される一方、体部外面のヘラ磨きは省略されている。本品は、その器形や調整の特徴からⅢ期の和泉型とみられる。

96は瓦器椀である。口縁部から体部の小片が残る。胎土は精良である。口縁端部は丸くおさめる。低平な器形で、内面には渦巻状の幅広いヘラ磨きが施される一方、体部外面のヘラ磨きは省略されている。本品は、その器形や調整の特徴からⅢ期の和泉型とみられる。

97は瓦器皿である。口縁部から見込みにかけて小片が残る。浅い器形で口縁部は横ナデし、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともヘラ磨きはみられない。本品は遺構内で共伴する瓦器椀の時期、調整の特徴からⅢ期の和泉型である可能性が高い。

98は土師器皿である。口縁部から底部の小片が残る。色調は少し黄味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデするが圈線までは認められない。外底面

は不調整である。

99は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。本品は口縁端部が直立気味で、その外面はわずかに囲線状に仕上がっている。

100は土師器皿である。ほぼ完形で、口縁部のごく一部を欠くが劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、質感とも103に類似し、口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。本品は口縁端部が直立気味で、その外面は囲線状に仕上がっている。外底面は不調整である。

101は土師器皿である。ほぼ完形で、口縁部のごく一部を欠くが劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、質感とも103に類似し、口縁部は横ナデを施すが端部のナデ調整は顕著ではない。外底面は不調整である。

102は土師器皿である。完形で劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、質感とも103に類似し、口縁部は横ナデを施すが端部のナデ調整は顕著ではない。外底面は不調整である。

103は土師器皿である。全体の4/5程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。粘土板に切り込みを入れて重ね合わせて成形している。その後口縁部に横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。このため、口縁端部外面はわずかに囲線状に仕上がっている。外底面は不調整である。

104は土師器皿である。完形で劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、質感とも103に類似するが、色調は白色味が強い。口縁部は外上方に直線的に開き、端部はそのまま丸くおさめている。外底面は不調整である。

105は土師器皿である。全体の3/4程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも103に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデするが、103のような囲線までは認められない。外底面は不調整である。

106は土師器皿である。全体の1/4程度が残り、色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも104に類似する。口縁部は一段の横ナデ調整で外上方に直線的に開き、端部はそのまま丸くおさめている。外底面は不調整である。

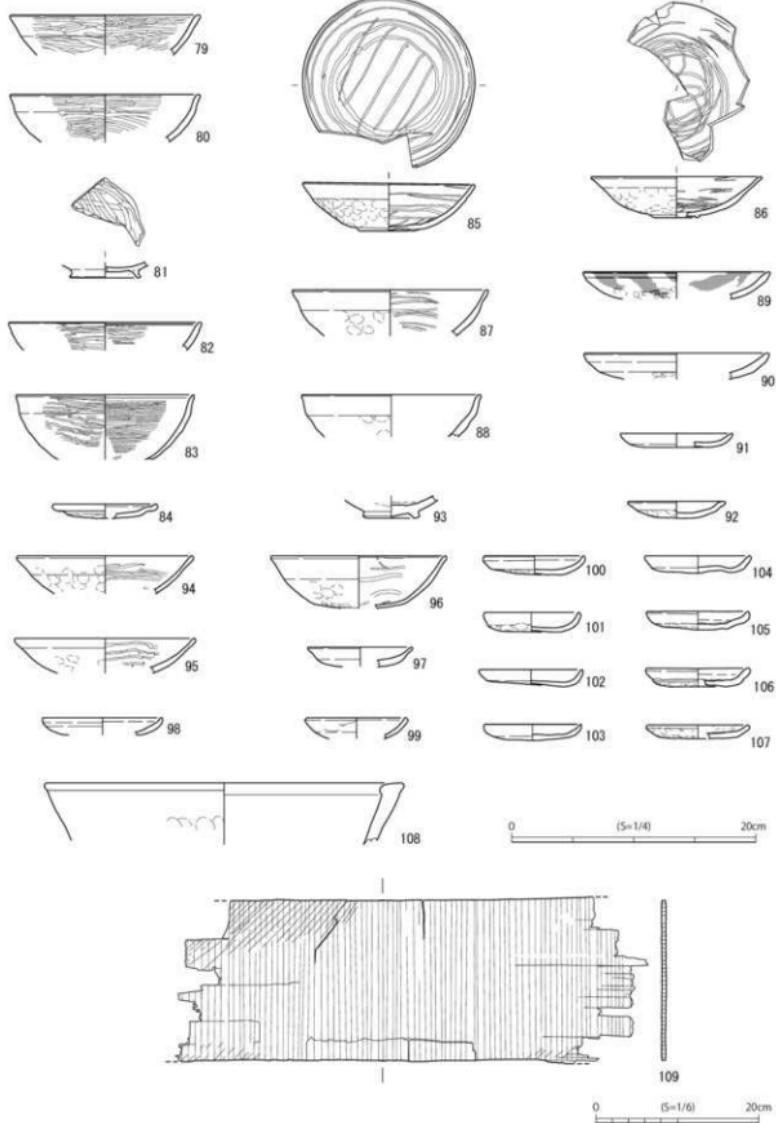
107は土師器皿である。全体の1/4程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は法量、質感とも103に類似し、口縁部は横ナデを施し口縁端部をさらに横ナデする。このため、口縁端部中央はわずかに囲線状に仕上がっている。外底面は不調整である。

108は瓦器盤である。口縁部の小片が残る。口縁端部は内傾して肥厚し、面を持つ。内面に横位のヘラ磨きを数条施す。管見では大阪府高槻市上牧遺跡出土品に類例がある。(高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』1980 第27図377)

109は木製曲物の側板の一部である。高さは約20cmで、材の両端は割れており原形を保っていない。内面には縦平行線と斜平行線のケビキを入れる(本稿中、曲物については奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』第II章8容器C円形曲物を参考とした)。

110は円形曲物である。井戸棒に転用したため底板を除いている。上下縁に箍をはめる。箍の綴じ合わせは上下1個所づつあり、いずれも2列前内6段後内2段綴じである(なお綴じ合わせの記述は前掲『木器集成図録 近畿古代編』に準じた)。下縁には底板をはめる木釘孔がある。側板の綴じ合わせは欠損部があり正確な段数は不明だが、1列内8段以上綴じである。内面には縦平行と斜平行を組み合わせたケビキを入れる。

井戸3 SE33



第22図 井戸3 (SE33) 出土遺物 1

111は円形曲物である。井戸枠に転用したため底板を除いている。上下縁に箍をはめる。箍の綴じ合わせは上下1個所づつあり、いずれも1列内6段綴じである。下箍には底板をはめる木釘孔がある。側板の綴じ合わせは1個所で1列内10段綴じである。内面には縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。

112は円形曲物である。井戸枠に転用したため底板を除いている。上下縁に箍をはめる。箍の綴じ合わせは上下1個所づつあり、いずれも上箍は2列前内5段後内1段綴じ、下箍は2列前内6段後内1段綴じである。下箍には底板をはめる木釘孔がある。側板の綴じ合わせは1個所で1列内8段綴じである。内面には縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。

113は円形曲物である。箍の高さに合わせて側板も切り縮め、最下段の井戸枠に転用したものである。本品は底板をはめる木釘孔が無く、上箍側であることがわかる。箍の綴じ合わせは1個所、1列内5段綴じである。側板の綴じ合わせは切り縮めのため本来の段数は不明だが、1個所で1列内4段以上の綴じである。内面には縦平行線と斜平行線のケビキを入れる。

■ピット1 (SP7) 出土遺物（第24図）

114は土師器皿である。完形で、内外以外は劣化なく遺存状態は良好である。色調は赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。本品は成形、調整は103のSE33底出土皿と同様だが、質感が少し異なり法量が一回り大きい。また、口縁端部をさらに横ナデする手法は、12世紀代の京都系土師器皿のそれに類似する。

115は土師器皿である。全体の1/2程度が残り、色調は赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも114に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

116は土師器皿である。全体の3/5程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも114に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

117は土師器皿である。全体の4/5程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は色調以外、法量、質感とも114に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

118は土師器皿である。全体の1/2程度が残り、色調はわずかに赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

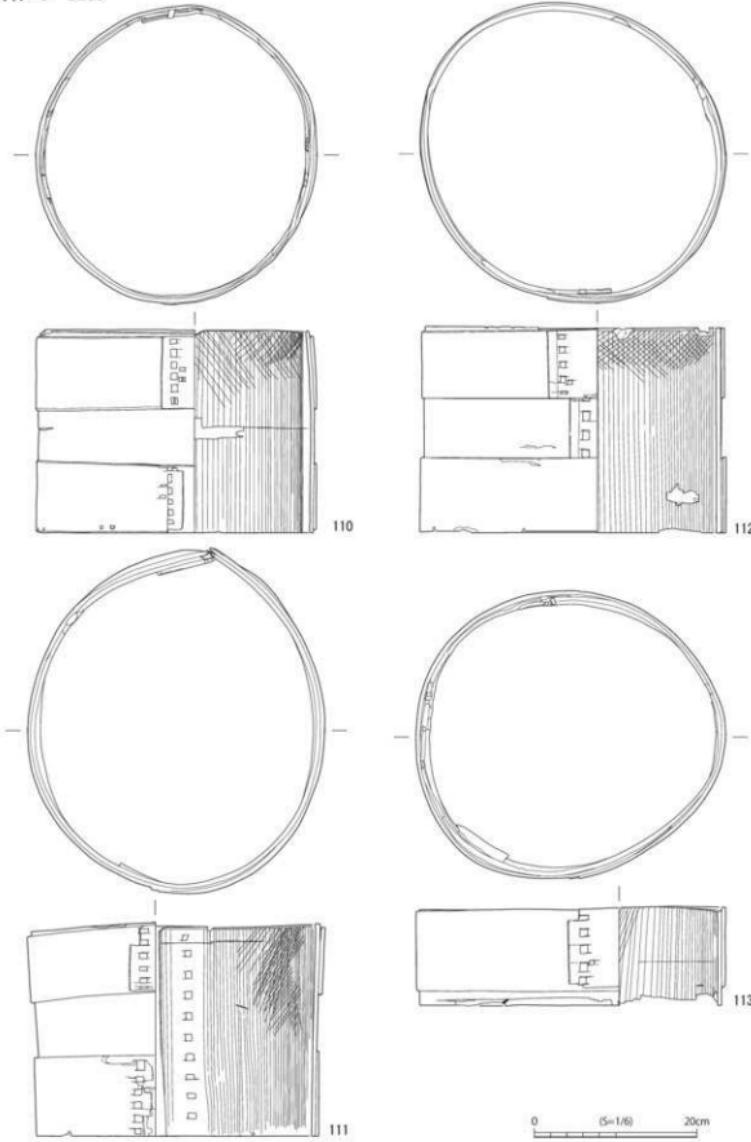
119は土師器皿である。全体の1/4程度が残り、色調はわずかに赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも118に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

120は土師器皿である。全体の1/2程度が残り、劣化なく遺存状態は良好である。色調は赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも114に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

121は土師器皿である。完形で、劣化なく遺存状態は良好である。色調は赤味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は法量、色調、質感とも114に類似する。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。このため、口縁端部中央は部分的に、わずかに閉線状に仕上がっている。外底面は不調整である。

122は土師器皿である。全体の3/4程度が残り、内面が少し劣化しているが遺存状態は良好である。色調は灰白色で胎土は精良である。本品は色調、法量、質感とも117に類似する。口縁部は横ナデ

井戸 3 SE33



第23図 井戸 3 (SE33) 出土遺物 2

を施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

123は土師器皿である。口縁部から底部の小片が残る。色調は赤味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し、口縁端部をさらに横ナデする。外底面は不調整である。

■土坑3(SK14) 出土遺物(第24図)

124は須恵器蓋環の蓋である。体部のほとんどを欠くが、天井部はほぼ完形。胎土は少量の白色砂粒を含むが精良である。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、少し鋭さに欠ける。天井部は扁平な形状である。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

125は須恵器蓋環の蓋である。体部の一部と天井部の1/4程度が残る。胎土は少量の白色砂粒を含み少し粗い。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、丸みを帯びる。天井部は扁平だが少し高さがある形状で、ヘラ削りの範囲は狭い。本品はTK23・47号窯出土品併行とみられるが、稜の形状やケズリ調整はより後出の印象を受ける。

126は須恵器無蓋高环の环部である。环部の小片が残るが脚部を欠く。胎土は白色砂粒を少し含み少し粗い。口縁部は外反気味に開き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部と底部とを分ける稜は鋭さに欠け、その下に櫛描き波状文を施す。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

127は製塩土器である。口縁部の小片で、外面は斜位のケズリ痕がつく。また内面には貝殻状痕の横位の調整をみとめる。船橋遺跡O-IV土師器436、O-V土師器530に類似するものか。

128は製塩土器である。口縁部の小片で、劣化が進み内外面とも調整は不明瞭であるが、外面にわずかに斜位のタタキ目をみとめる。

129は土師器皿である。全体の1/6程度が残り、色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施して屈曲し、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。外底面は不調整である。本品はての字状口縁の小皿で、口縁端部の巻き込みが弱く器壁が5mmと厚いなど、終末期の形態である。

130は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。色調は灰白色で、胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し丸くおさめた端部をさらに軽く横ナデする。

131は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。色調は乳白色で、胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し丸くおさめた端部をさらに横ナデするため、内端面には調整痕が幅広の沈線状に残る。

■SP9 出土遺物(第25図)

132は弥生土器の壺である。底部の小片である。器壁全体に劣化が進み調整は判然としない。外面にはわずかに縦位のヘラ磨きを認めることができ、内面は指おさえの痕が残るがナデで平滑にしている。

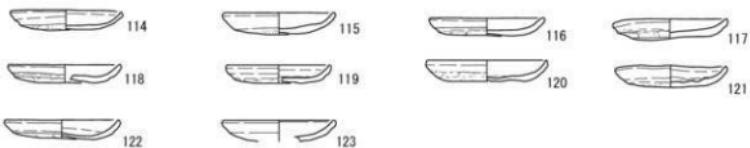
■SP8 出土遺物(第25図)

133は土師器皿である。口縁部から体部の小片が残る。色調は少し黄味がかった灰白色で、胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し端部は薄くするが、さらに横ナデは行わない。

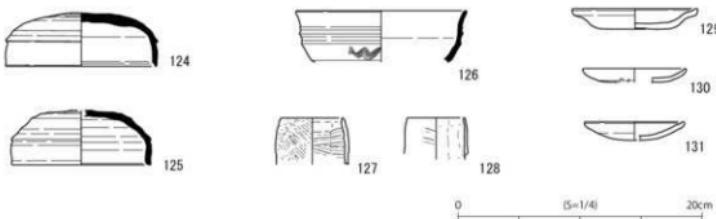
■SD32 出土遺物(第25図)

134は須恵器蓋環の环である。たちあがりの1/5程度と体部の一部が残る。胎土は白色砂粒を含むが精良である。たちあがりは少し内傾気味で、その口縁端部内面は内傾して段を持つ。TK23・47

ピット1 SP7



土坑3 SK14



第24図 ピット1 (SP7) 土坑3 (SK14) 出土遺物

号窯出土品併行とみられる。

135は瓦器椀である。全体の1/4程度が残る。胎土は精良である。口縁端部内面に沈線状の段を持つ。体部は丸く、その外面下部に形骸化した高台を貼り付けている。口縁部内面から内底面にかけて、連續渦巻状のヘラ磨きをみとめる。本品は、その器形や調整の特徴から攝入品の大和型（Ⅲ～Ⅳ期）とみられる。

■ SX1 出土遺物（第25図）

136は須恵器蓋環の蓋である。天井部と体部の小片が残る。胎土は砂粒を含み、少し粗い。口縁端部内面は内傾して段を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、少しシャープさに欠ける感じを受ける。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

137は須恵器蓋環の蓋である。体部と天井部の小片が残る。胎土は少量の白色砂粒を含み少し粗い。口縁端部内面は内傾して面を持つ。天井部と体部とを分ける稜は短く、少しシャープさに欠ける感じを受ける。天井部は自然釉がみられて丸みを帯びる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

138は須恵器蓋環の环である。たちあがりと体部の小片が残る。胎土は砂粒を含み、少し粗い。たちあがりは他と比べて少し低い。その口縁端部内面は内傾して段を持つ。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

139は須恵器無蓋高坏の坏部である。坏部の1/2程度が残るが脚部を欠く。胎土は白色砂粒を少量含み精良である。口縁端部内面はほとんど内傾せず、わずかに段を持つ。口縁部と底部とを分ける稜は少し鋭さに欠け、器高はさほど高くなく扁平気味である。なお、坏底部内面から体部内面は灰がかぶる。3の無蓋高坏と比べると、口径は小さく器高も低い。また、体部から口縁端部にかけての形状も異なる。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

140は須恵器有蓋高壺の脚部である。脚部の1/6程度が残るが壺部を欠く。胎土は砂粒をほとんど含まない。三方透かしをもつ短い脚部で、内外面とも丁寧にナデている。脚部の端部は丸くおさめ、シャープさに欠ける形状である。TK23・47号窯出土品併行とみられる。

141は土師器壺である。ほぼ完形である。直立気味の口縁部で、端部は横ナデして丸く収める。体部上半はそれほど丸みは帯びない。底部は安定のよい丸底である。壺の内面は横ナデし比較的平滑に仕上げる。外面上半は横ナデし、下半から底部はケズリとナデを施す。器壁は口縁部から体部上半に比べて体部下半から底部は厚く、全体にシャープさに欠ける印象を持つ。

142は小型の土師器甕である。口縁部から頸部の小片である。胎土は砂粒を含み少し粗い。器壁の劣化のため調整が判然としない。口縁部は軽く外反しながら開き、端部は細く丸くおさめる。口縁部外面は横ナデを行なうが内面は不明。頸部は外面に縦位のハケ調整、内面に横位のハケ調整をわずかに認める。

143は土師器甕である。口縁部のみ1/4程度と体部の小片である。胎土は白色砂粒を含み少し粗い。器壁は劣化が進み調整は不明瞭である。口縁部は軽く外反しながら短く開き、端部は丸くおさめる。体部外面は縦位のハケ調整を行い、内面はナデで平滑にしている。

144は布留形の土師器甕である。口縁部の小片で、色調は少し黄味がかった灰白色で胎土は砂粒を含み少し粗い。器壁の劣化のため調整は不明。口縁部は外上方に軽く内湾しながら開く。口縁端部は内傾して肥厚し、面を持つ。

145は布留形の土師器甕である。口縁部の1/2程度が残る。胎土は砂粒を含むが比較的精良である。器壁は全体に劣化が進み調整は不明瞭である。口縁部は外上方に軽く内湾しながら開き、口縁端部は内面に少し肥厚し、内傾した幅広の面を持つ。

146は瓦器椀である。口縁部から体部上位にかけての小片である。外面は粗く太い分割ヘラ磨きを施すが、ヘラ削りは確認できない。内面は太いヘラ磨きを密に施している。口縁端部は丸くおさめる。本品は口縁部の形状や調整などから、Ⅱ期の和泉型とみられる。

147は瓦器椀である。口縁部から体部上位にかけての小片である。口縁端部は丸くおさめるなど146に類似するが、口縁外面の横ナデを二段とし幅広い点が異なる。外面は粗く太い分割ヘラ磨きを施すが、ヘラ削りは確認できない。内面は太いヘラ磨きを密に施している。本品は口縁部の形状や調整などから、Ⅱ期の和泉型とみられる。

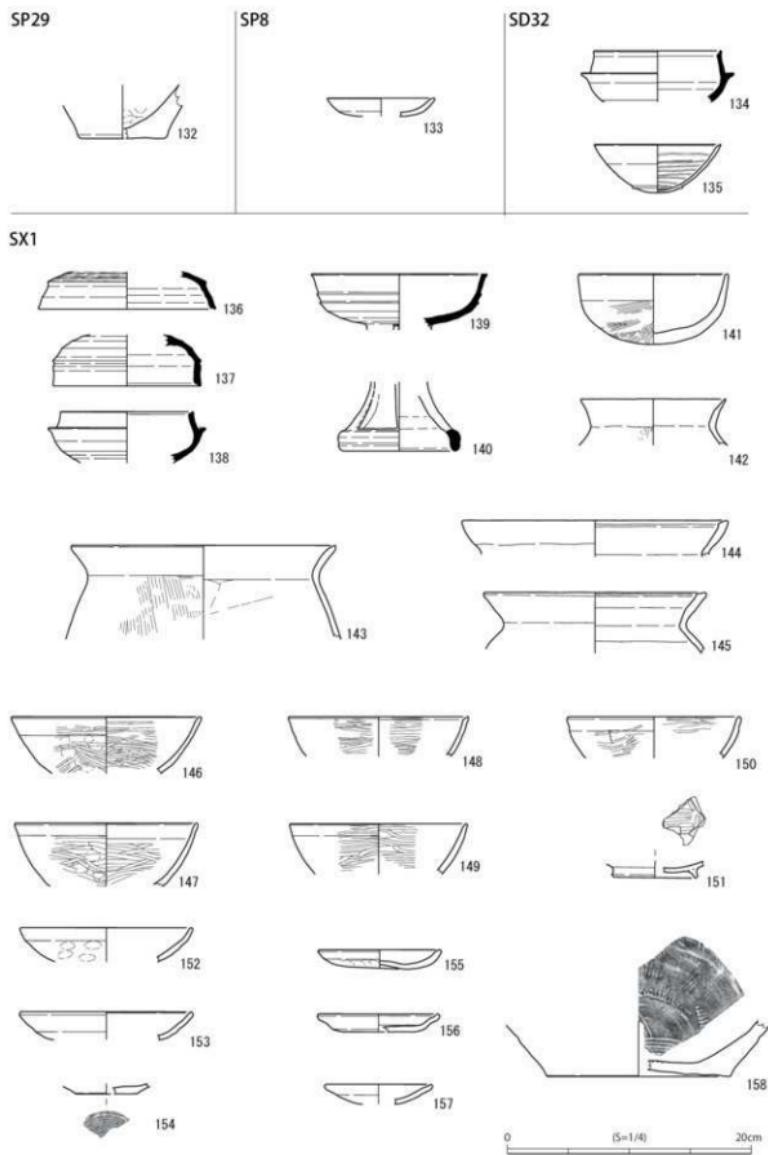
148は瓦器椀である。口縁部から体部上位の小片が残る。胎土は精良である。口縁端部は外反して丸くおさめ、端部内面に一条の幅広い沈線をわずかに段をつけるように施す。内外面は密にヘラ磨きされるが、外面にヘラ削りはみられない。本品はその器形や調整の特徴からⅡ期の大和型とみられる。

149は瓦器椀である。口縁部から体部上位にかけての小片である。外面は太い分割ヘラ磨きを密に施すが、ヘラ削りは確認できない。内面は太いヘラ磨きを密に施している。口縁端部は丸くおさめる。本品は口縁部の形状や調整などから、Ⅱ期の和泉型とみられる。

150は瓦器椀である。口縁部から体部上位の小片が残る。胎土は少し粗い。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁端部以外、炭素吸着がなされておらずヘラ磨きも見られない一方、体部外面には粗く幅広のヘラ磨きがみられる。本品は、その器形や調整の特徴からⅡ期の和泉型とみられる。

151は瓦器椀である。高台の小片が残る。外側に踏ん張る形状で、見込みは密にヘラ磨きされる。本品は小片だが、遺構内で共作する瓦器椀の時期、高台の形状や調整の特徴からⅡ期の和泉型とみられる。

152は土師器大皿である。口縁部から体部の小片である。灰白色の精良な胎土で、口縁部は横ナ



第25図 その他の遺構出土遺物 1

デを施し口縁端部をさらに横ナデする。

153は土師器大皿である。口縁部から体部の小片で、色調は少し赤味がかった灰白色で精良な胎土である。口縁部から体部上位は横ナデを二段施す。口縁端部をさらに横ナデするため、端部外面は面を持つ。

154は土師器皿である。底部の小片が残る。色調は乳白色で、胎土は砂粒を含み少し粗い。底部外面に回転糸切り痕を認める。本品は共伴する瓦器椀の時期、色調や成形技法などから洛北産の可能性が高い。

155は土師器皿である。全体の4/5程度が残り、少し劣化しているが遺存状態は比較的良好である。色調はわずかに赤味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施し端部は丸くおさめる。本品は色調、質感はSP7出土皿に類似するが、法量が一回り大きい。また、口縁端部の横ナデは行わない。外底面は不調整である。

156は土師器皿である。全体の1/6程度が残り、色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施して少し屈曲し、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。外底面は不調整である。本品も157と同様の、ての字状口縁の小皿で終末期の形態である。

157は土師器皿である。全体の1/5程度が残り、色調は赤味がかった灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施して少し屈曲し、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。外底面は不調整である。ての字状口縁の小皿で終末期の形態である。

158は備前系陶器の播鉢である。底部から体部下位の小片が残る。胎土は精良で堅致に焼成されている。よく使われており、内面の播目はほとんど摩滅している。本品は173に色調や質感、播目の形状が類似し、同時期(17C後半)である可能性が高い。

■ SX15 出土遺物(第26図)

159は黒色土器B類の椀である。口縁端部のごく小片で、内外面とも劣化が進み、調整は不明瞭である。内面に沈線一条をみとめる。

160は黒色土器A類椀である。底部から体部下位の小片が残る。胎土は砂粒を含み少し粗い。底部と体部の境に高い高台を貼り付けている。底部は平坦な形状で、外面には回転糸切り痕がわずかに残り回転台成形とみられる。本品は畿内周辺部からの搬入品であろう。

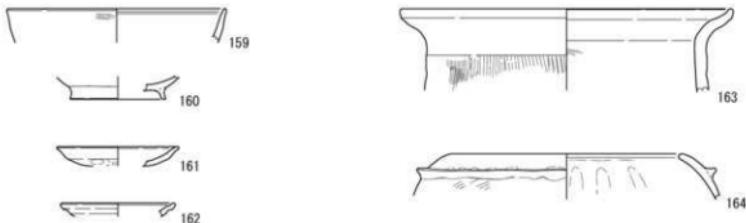
161は土師器皿である。口縁部から底部の小片である。乳白色系の精良な胎土で、口縁部は横ナデのため端部が外反気味に仕上がっている。底部外面には指おさえの痕が残る。

162は土師器皿である。口縁部の小片が残る。色調は灰白色で胎土は精良である。口縁部は横ナデを施して屈曲し、端部は内側へ肥厚し丸くおさめる。本品は、ての字状口縁の小皿で器壁が厚くなる終末期の形態である。

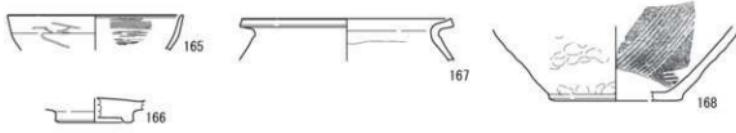
163は土師器鍋である。口縁部から体部の小片である。胎土は砂粒を含み少し粗い。全体に器壁は厚く、外面には煤が付着している。口縁部は内外面とも横ナデ調整で軽く外反しながら短く開き、端部は少し上方へ引き上げられ外端面に面を持つ。体部外面は縦位のハケ調整を行い、内面はナデにより平滑にしている。本品は瀬戸内方面からの搬入品の可能性が高い。

164は瓦質土器三足釜である。内傾する口縁部の小片で、外面に断面三角の小さな釣を貼り付けている。また、釣部以下の外面には煤が付着している。

SX15



SX18



0 (5=1/4) 20cm

第 26 図 その他の遺構出土遺物 2

■ SX18 出土遺物（第 26 図）

165 は瓦器椀である。口縁部から体部上位の小片が残り、炭素吸着がなされていない。胎土は精良である。口縁端部は外反して丸くおさめ、端部内面に一条の幅広い沈線を段をつけるように施す。内外面はヘラ磨きされるが、外面はかなり省略されている。本品はその器形や調整の特徴からⅡ期の大和型とみられる。

166 は青磁椀である。見込みから高台部の 1/2 程度が残る。高台部外底面は無釉。本品は龍泉窯系青磁椀 I 類とみられ、12C 中頃～後半に比定できる。

167 は土師質土器上釜である。口縁部から頸部の小片が残る。口縁部は横ナデにより平滑にされ、口縁端部は少しつまみ上げられている。外面は煤が付着する。本品は大和型の土釜とみられ、16C 後半に比定できる。

168 は不明陶器の擂鉢である。底部から体部下位の小片が残る。色調は淡灰白色で胎土は少し粗い。焼成は還元焼成だが、全体に瓦質感があり軟質である。内面に 10 条 / 単位の擂目を施す。底部から体部へのたちあがりは少し摩滅している。本品は龍泉窯系青磁椀が共存していることと擂目の特徴から、初期の備前系陶器の擂鉢である可能性が高い。

■ 包含層 出土遺物（第 27 図）

169 は土師器环である。口縁部から体部の一部を欠くがほぼ完形である。直立気味の口縁部で、端部は横ナデして丸く收める。体部上半はそれほど丸みは帶びない。底部は安定のよい丸底である。环の内面は横ナデし比較的平滑に仕上げる。外面上半は横ナデし、下半から底部はケズリとナデを施す。器壁は全体に厚く、シャープさに欠ける印象を持つ。

170は土師器皿である。全体の1/5程度が残り、色調はごく深い橙灰色で胎土に金雲母を含む。口縁部は二段の横ナデを施し、外底面は不調整である。

171は瓦器皿である。口縁部から見込みにかけて2/5が残る。丸みを帯びた少し深めの器形である。口縁端部は丸くおさめ、外面の横ナデは端部から少し間をあけている。底部外面を除いて内外面とも密にヘラ磨きされ、見込みには平行ヘラ磨きが認められるなど、本品はⅡ期の和泉型である可能性が高い。

172は東播系須恵器の片口鉢である。口縁部から体部上位の小片が残る。口縁端部は回転ナデにより上方へ拡張する。体部は少し外反気味に直線的に開く。本品はその器形の特徴から、第Ⅱ期（12世紀中葉～13世紀初頭）に比定される。

173は備前系陶器の擂鉢である。口縁部の小片が残る。胎土は精良で堅致に焼成されている。口縁内端面に段を作り、口縁外面には三条の凹線を巡らせる。東京大学構内の出土例を参考にすれば17C後半に比定される。（「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」（「東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度」東京大学埋蔵文化財調査室 2011））

174は丹波波系陶器の擂鉢である。内面に七条／単位の撻目を施し、見込みにも体部との境に丸く擂目を施す。口縁端部は縁帶を呈し外面に自然釉がみとめられる。東京大学構内の出土例を参考にすれば18C後半～19C前半に比定される。（「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」（「東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度」東京大学埋蔵文化財調査室 2011））

175は青磁椀である。口縁部から体部上位の小片が残る。体部外面に櫛目文、内面に沈線と草花文を施す。本品は同安窯系青磁椀I類とみられ、12C中頃～後半に比定できる。

176は白磁椀である。口縁部の1小片が残る。口縁端部は肥厚し玉縁状である。内外面とも厚く施釉され、貫入がみられる。本品は、大宰府条坊跡の出土例では白磁椀IV類とされる製品で、11世紀後半～12世紀前半頃に比定される。

177は剣形石製品である。切先をわずかに欠くが基部側まで残り、ほぼ完形である。基部側に懸垂用の小孔を一つ穿つ。本品は、全体の形状は形式化が進むいっぽうで、鎬の表現を残す少し不整な菱形の断面や、基部側で平面三角形状に稜をつくり出すなど、祖型である石製剣を意識した具体な形を残しているところがみとめられる。

さて、剣形石製品は古墳時代の祭具で石製剣をモデルとし、初期のものほど写実性が高いとされる（河野一隆「石製模造品」（『考古資料大観』第9巻 小学館2002））。本品のようにその一部に具体的な形状を残すものとして、菅見では愛知県神明遺跡や水入遺跡に類例があり（早野浩二「- 県内遺構・遺物集成 - 石製模造品」第5図17・18（『研究紀要』第7号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2006）、共井遺物から5C前半ごろの年代觀が与えられている。本品は遺物包含層からの出土であることから年代觀の付与には慎重であるべきだが、同じ調査区内で出土している、古墳時代の須恵器蓋杯の大半が、TK23・47号窯出土品に併行する時期であるとみられることから、5C後半から末の所産である可能性を指摘しておく。

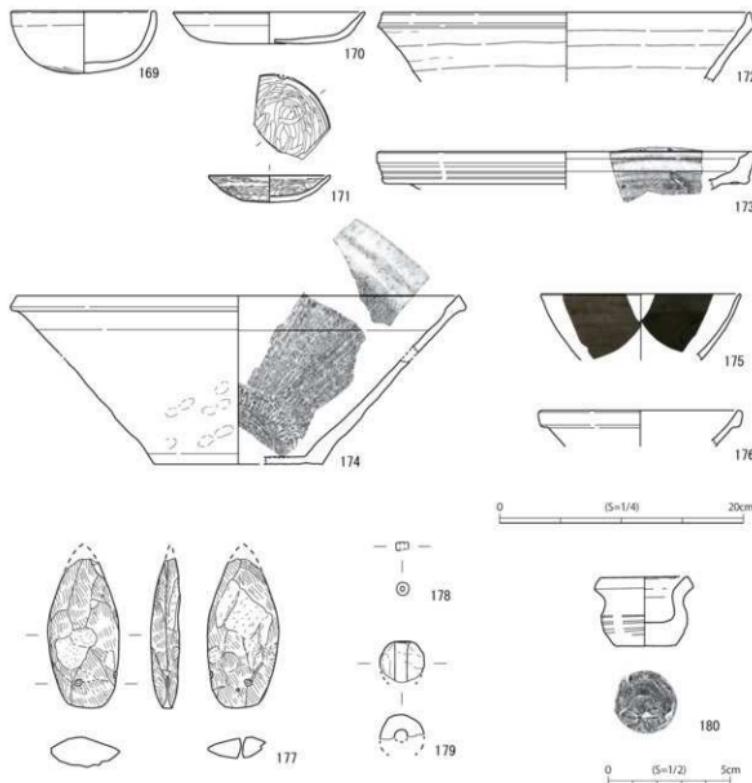
178は白玉である。両端のごく一部を欠くが、ほぼ完形である。色調は淡灰緑色だが全体に白っぽい。

179は土玉である。全体の1/2程度が残る。色調は少し黄味がかかった淡灰白色で、胎土は精良である。中央を焼成前に穿孔し、外面はナデで平滑にしている。

180は土師器のミニチュア壷である。口縁部のごく一部を欠くが、ほぼ完形である。色調は少し黄味がかかった灰白色で胎土は精良である。本品は、回転台により成形と調整を行ついわゆる「回転台土師器」である。底部円板に別の体部を接合して作られており、体部の上位を絞って口縁部から頸部を成形したことによる絞り目が頸部内面に残る。口縁部は短く外反し、口縁端部は面を持つ。底部は

平底で、底部外面には回転糸切痕が残る。本品は製作技法からみれば中世以前に遡りえる可能性があるが、本調査区においては近世の備前系擂鉢や丹波系擂鉢と共に出土していることから、近世の所産とみられる。

包含層出土遺物



第27図 包含層出土遺物

(註) 今回の調査区から出土した須恵器についての所見

- ・全体には、TK23-47号窯出土品併行である。そのうえで、ロクロ右回転が目立つことや全構を通じて右回転が半数以上であることを考慮すると、TK47号窯出土品併行に近い様相である。
- ・また色調や胎土、焼成等から3系統に分類可能。1) 青灰色で精緻の群→陶邑窯の所産であろう。2) 少し色調が淡く砂粒を含み厚手で粗製氣味の群→北浜・桜井谷窯の所産の可能性がある。3) 焼成が甘く胎土に砂粒を含む少量の群→乙訓郡窯の所産の可能性がある。
- ・SK21・26出土品が古粗。5C後半でも中葉寄り。
- ・SD31出土品が新相。
- ・なおSK26出土品のうち瓦質焼成品が陶邑以外の他産地の可能性がある。
- ※我妻 佑哉氏の教示による。

遺構名	時期	長径	短径	深さ	おもな埋土	おもな出土遺物	備考
SP2		0.29	0.29	0.1	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP3		0.32	0.28 以上	0.16	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP4		0.36	0.34	0.1	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP5		0.19	0.16	0.04	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP6		0.24	0.22	0.09	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP7 ビット1	中世	0.23	0.21	0.03	5Y4/1 灰色 砂質シルト	土師器10点	
SP8		0.31	0.28	0.29	5Y4/1 灰色 砂質シルト	土師器1点	
SP9		0.23	0.21	0.07	5Y4/1 灰色 砂質シルト	弥生土器底部片1点	
SP10		0.57	0.42	0.29	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP11		0.21	0.19	0.05	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP12		0.29	0.29	0.04	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP19		0.22	0.21	0.05	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP22		0.19	0.18	0.07	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP23		0.44	0.40	0.06	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP24		0.15	0.14	0.05	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP25		0.23	0.21	0.1	5Y4/1 灰色 砂質シルト		
SP27		0.28	0.28	0.19	5Y4/1 灰色 砂質シルト灰白色ブロック土混じる		
SP29		0.30 以上	0.15 以上	-	5Y4/1 灰色 砂質シルト	弥生土器1点	側溝にて消失
SD13 溝4	中世	3.33 以上	0.52	0.19	2.5Y7/2 灰黄色 粗粒砂	土師器、須恵器、瓦器	
SD28 溝1	古墳時代	14.26 以上	0.92	0.33	7.5Y6/1 灰色 黏土	古瀬戸系陶器1点、土師質土器1点	SE26より古い
SD30 溝2	古墳時代	1.63 以上	0.66	0.27	2.5Y6/1 黄灰色 細粒砂	土師器2点	
SD31 溝3	古墳時代	1.81 以上	0.76	0.9	10YR5/2 灰黃褐色 砂質シルト	須恵器3点、土師器3点	
SD32		5.04 以上	2.14	-	5Y4/1 灰色 砂質シルト	須恵器、瓦器	検出のみ
SK14 土坑3		0.93 以上	0.51	0.47	10YR6/1 褐灰色 黏土	須恵器3点、土師器5点	
SK20 土坑1	古墳時代	0.29 以上	0.69	0.41	7.5YR2/1 黒色 黏土		
SK21 土坑2	古墳時代	0.76 以上	1.46	0.64	7.5Y6/1 灰色 黏土	須恵器9点、土師器24点、木製品1点	
SE16 井戸1	古墳時代	1.27	1.03	0.41	7.5Y6/1 灰色 黏土 7.5Y5/1 灰色 黏土	土師器7点、須恵器3点	
SE26 井戸2	古墳時代	0.94	0.78	0.4	7.5Y5/1 灰色 黏土	土師器1点、須恵器9点	SD28より新しい
SE33 井戸3	中世	2.0	2.03	0.65	7.5Y7/1 灰白色 粗粒砂	瓦器、曲物(井戸枠)	
SX1		-	-	-	5Y4/1 灰色 砂質シルト	須恵器、瓦器、土師器、陶磁器	検出のみ
SX15		2.0 以上	3.97	-	5Y4/1 灰色 砂質シルト	黒色土器、瓦器	検出のみ
SX17		1.49	0.73	0.4	5Y5/1 灰色 砂質シルト		
SX18		1.02～	1.67	0.28	7.5Y6/1 灰色 黏土	瓦器、土師器、擂鉢	

表2 検出遺構一覧表

遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)			所見
				口径	器高	底径	
88	SE33 捣り方	土師器	壺	(14.6)	(3.45)	—	—
89	SE33 捣り方	土師器	灯明皿	(15.2)	(2.2)	—	—
90	SE33 捣り方	土師器	皿	(15.0)	(2.15)	—	—
91	SE33 捣り方	土師器	小皿	(9.1)	1.1	(5.0)	—
92	SE33 捣り方	土師質 土器	炮烙	(7.7)	(1.4)	—	—
93	SE33 捣り方	白磁	皿	—	(1.85)	(3.75)	—
94	SE33 (曲物内)	瓦器	椀	(14.3)	(3.1)	—	—
95	SE33 (曲物内)	瓦器	椀	(14.6)	(2.85)	—	—
96	SE33 (曲物内)	瓦器	碗	(14.2)	(4.3)	—	—
97	SE33 (曲物内)	瓦器	椀	(8.4)	(1.6)	—	—
98	SE33 (曲物内)	土師器	小皿	(9.6)	(1.4)	—	—
99	SE33 捣り方	土師器	小皿	(7.9)	(1.7)	—	—
100	SE33 底	土師器	皿	8.05	1.6	6.2	—
101	SE33 底	土師器	皿	(7.7)	1.6	4.9	—
102	SE33 底	土師器	皿	8.35	1.4	6.0	—
103	SE33 底	土師器	小皿	7.9	1.35	5.0	—
104	SE33 底	土師器	皿	8.45	1.4	5.5	—
105	SE33 底	土師器	皿	8.2	1.5	5.2	—
106	SE33 底	土師器	小皿	(8.4)	1.5	(6.9)	—
107	SE33 底	土師器	皿	(8.2)	1.1	(6.4)	—
108	SE33 (曲物内)	瓦質土 器	鍋	(29.0)	(5.1)	—	—
109	SE33	木製品	曲物	縦 19.6～ (44.5)～ 20.4	横 0.55 (56.9)～	厚さ 0.55	—
110	SE33 (曲物③)	木製品	曲物	径 高さ 25.0	34.5× 36.8	厚さ 1.4	—
111	SE33 (曲物①)	木製品	曲物	高さ 26.3	径 36.6× 43.0	厚さ 2.35	—
112	SE33 (曲物②)	木製品	曲物	高さ 25.4	径 37.2× 36.7	厚さ 1.65	—
113	SE33 (曲物①)	木製品	曲物	高さ 12.1	径 38.1× 35.4	厚さ 2.8	—

表3 遺物一覧表 (4)

第4章　まとめ

今回の調査は、全工事対象区域7,830m²に対して、211m²しか発掘調査できなかつたが、非常に多くの遺物が出土し、大いなる成果をあげたといえよう。

調査の結果、古墳時代中期末と中世の2つの時期の遺構を確認し、調査地周辺に集落が存在したことがあらためて確認された。

平成14（2002）年の調査において、門真市で初めて古墳時代の集落跡が発見されたが、今回の調査でも同時期の集落に伴う遺構・遺物が確認された。今回の調査においては確たる建築物遺構は確認できなかつたが、古墳時代の集落が存在したことを確実視することができる井戸や掘立柱建物の柱跡と考えられる土坑が検出された。また別の土坑から建物に用いられたであろう木製扉板も出土しており、建物が存在したことは疑いない。木製扉板が出土した土坑からは、平成14年の調査でも出土している製塩土器が多く出土した。古墳時代中期末は周辺まで河内潟の北岸が存在したことが判明しているが、平成14年に発見された集落と同じ5世紀後半に、塩の生産をおこなっていた集落が周辺では複数営まれていたと思われる。また木製扉板の下に完形の土師器甕が埋納されており、木製扉板は部材として木棺直葬墓の構築に転用された可能性がある。

その後、中世の早い段階で、古代の遺構面が削平され、中世の集落が営まれたことが確認された。今回の調査地の東約1.5kmの普賢寺遺跡も、令和2（2020）年の調査において、同様に古墳時代中期末と中世の遺構が混在して検出されており、中世以前に門真市域において大規模な削平がおこなわれたと推察される。また調査区断面観察の結果、調査区北側の埋土を南側の窪みの埋め立てに用いた形跡がみられるため※、削平の後、中世の遺跡が形成される際に整地がおこなわれたと考えられる。

今回検出された中世の集落は、昭和62（1987）年に今回調査地の南約150mの橋波口遺跡で発見された古代の集落と近接しており、検出された遺構・遺物と性格も似ている。あるいは橋波口遺跡の集落が、中世初頭の大規模削平の後、今回の調査地を整地して南から移転してきたのかもしれない。

平成28（2016）年の調査において、調査区の西側に中世の集落が存在する可能性を指摘したが、東側に位置する今回の調査区にて中世の集落の存在をあらためて確認した。

これまでの調査において、古墳時代および中世の遺物が多く出土し、門真市域に広く集落が分布していたことはわかっていたが、集落に伴う遺構を検出できた例は少なかつた。今回の調査において、古墳時代中期末と中世のおよそ600年を挟んだ2つの時期に、旧淀川支流域左岸微高地上の同じ場所でヒトの活動の痕跡を確かに示す集落遺構を確認できた意義は大きい。

調査地周辺は、後世の開発により、多くの遺構が失われているが、大規模な集落が存在したことが予想され、今後の調査において、より多くの知見が得られることが期待される。

※道 哲済氏の教示による。

参考文献

- ・門真市『門真市史』第一巻 地理・古代文献 1988
- ・門真市『門真市史』第二巻 中世文献・考古 1992
- ・門真市教育委員会『門真市文化財ガイドブック』 2006
- ・門真市教育委員会『宮野道路発掘調査概要』 1982
- ・門真市教育委員会『普賢寺道路発掘調査概要・I』 1990
- ・門真市教育委員会『普賢寺道路発掘調査概要・II』 1991
- ・門真市教育委員会『門真市横波口道路発掘調査概要』 1992
- ・門真市教育委員会・守口市教育委員会『西三莊・八雲東道路発掘調査概要』 1993
- ・門真市教育委員会『古川道路』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 1999
- ・門真市教育委員会『普賢寺古墳』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 2000
- ・門真市教育委員会『元町道路』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 2003
- ・門真市教育委員会『史跡 伝茨田堤発掘調査報告書』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 2014
- ・門真市教育委員会・公益財團法人大阪府文化財センター『西三莊道路』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集・公益財團法人大阪府文化財センター調査報告書第272集 2016
- ・門真市・公益財團法人大阪府文化財センター『普賢寺遺跡』門真市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集・公益財團法人大阪府文化財センター調査報告書第320集 2022
- ・財團法人大阪府文化財センター『三ツ島遺跡』 1997
- ・財團法人大阪府文化財センター『巣本遺跡』『巣本遺跡Ⅰ』財團法人大阪府文化財センター調査報告書第167集 2008
- ・財團法人大阪府文化財センター『巣本遺跡Ⅱ』『巣本遺跡Ⅲ』財團法人大阪府文化財センター調査報告書第183集 2008
- ・大阪府教育委員会『三ツ島西遺跡発掘調査概要・I』 1992
- ・大阪府教育委員会『宮野遺跡』 2001
- ・平安学園考古学クラブ『船橋Ⅱ』
- ・平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群』 1966
- ・中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
- ・橋本久和『概論 瓦器釉研究と中世社会』 2018
- ・太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV・陶磁器分類編』 2000
- ・奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』 1985

写真図版



平成 14 年調査地（元町中央公園）

図版 1



写真 1 調査区北側 真上より



写真 2 調査区北側 真上より



写真3 調査区中央 真上より



写真4 調査区南側 真上より



写真5 井戸1(SE16) 東から



写真6 井戸2(SE26) 東から



写真7 土坑1(SK20) 東から



写真8 土坑2(SK21) 上層 東から



写真9 土坑2(SK21) 下層 東から



写真10 溝1(SD28) 南から

写真11 溝2・3(SD30・31) 西から



写真 12 井戸 3 (SE33) 西から



写真 13 井戸 3 (SE33) 南から



写真 14 SP7 (ピット 1) 遺物出土状況 上層



写真 15 SP7 (ピット 1) 遺物出土状況 下層



写真 16 土坑 3 (SK14) 南から



写真 17 下層確認トレンチ



写真 18 調査状況 1



写真 19 調査状況 2



出土遺物写真 1



11



12



13



17



18



21



22



24



25



26



出土遺物写真 3



37



40



38

39

41

42

43

45

46



44



48



50



61





68



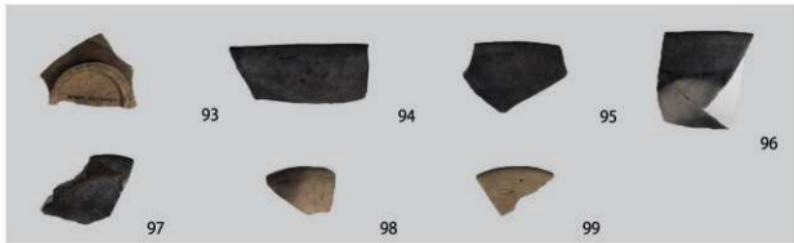
出土遺物写真 7



85



86



93

94

95

96

97

98

99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



141



145

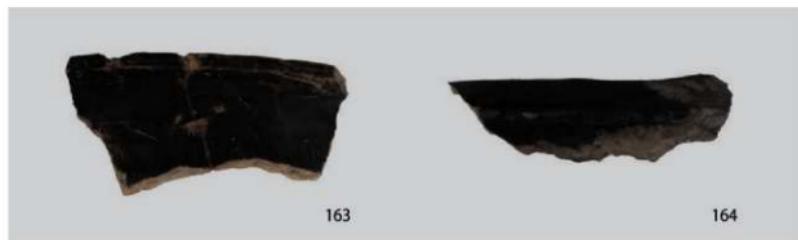




155



169



163

164



165

166

167

168



170

171

172

173

174

175

176



出土遺物写真 14

報告書抄録

門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

元町遺跡Ⅱ

令和4年(2022)12月26日

編集・発行 門真市 市民文化部 生涯学習課 歴史資料館

〒571-0041 大阪府門真市柳町11番1号

Tel.06-6908-8840

印刷

和泉出版印刷株式会社

〒542-0012 大阪府大阪市中央区谷町7-5-4-201

Tel.06-6946-1073

